帝國實業讀本 改制新版 卷三

3759
Hat
資料室

42484
教科書文庫
4
810
44-1938
~~20000~~
~~41403~~
200030
2772

文部省檢定濟
昭和十三年一月十一日　實業學校國語科用

帝國實業讀本

改制新版

文學博士　芳賀矢一　編
文學博士　上田萬年
文學士　長谷川福平　訂補

合資會社　冨山房發兌

資料室
3759
Ha7

千早ぶる
神の代もきかず
龍田川
からくれなゐに
水くくるとは

御旗の光　石川寅治筆

廣島大學圖書之印

廣島大学教図書
41403

帝國實業讀本 改制新版 卷三

目次

一 御旗の光……大島正滿…一
二 大日本國(詩)……八
三 勿來の關……熊田葦城…一〇
四 古名將の學問……湯淺元禎…一三
五 我が國往時の商工業……杉山重義…二一
一舉萬得(自修文)……福田德三…二六
六 春の一日……島崎藤村…三三
七 體育と競技……永井潛…三七
八 喬木(詩)……萬造寺齊…四六

九 越後屋の創業……澤田謙……五一
第二のカーネギーとなる道（自修文）……（美談逸話集）……六〇
一〇 佛の化身……相馬御風……六三
一一 趣味の嚴島……五十嵐力……七一
一二 さわやかな心……河野省三……七五
一三 朝（詩）……川路柳虹……八六
一四 夏の小暦……田山花袋……八七
一五 山嶽の日本……大町桂月……九二
一六 夕陽の美……高山林次郎……九九
一七 偉人野口英世……一〇三
大村彦太郎と三輪執齋（自修文）……一一〇
一八 蟲の音……高濱虛子……一一七
一九 大海原の歌（詩）……坪内逍遙……一二八

二〇 今……市島春城……一三一
二一 窓のすさみ……松崎堯臣……一三八
二二 桃山御陵……田山花袋……一四三
ゆかしの杉（自修文）……幣原坦……一四七
二三 繪畫の感化……那珂通高……一五四
二四 師の恩……柳澤淇園……一六二

帝國大學圖書之印

帝國實業讀本 改制新版 卷三

一 御旗の光

大島正滿(一)

世界戰爭もたけなはの頃の事であつた。獨艦エムデンが遠く印度洋上に出沒して、狂暴の限りを盡す。英の巨船ルシタニア(二)は北海の藻屑と消えて、アンクル・サム(三)を戰の渦中に卷込んでしまふ。物情騷然、聯合軍の旗色は稍怪しくなつて來たので、ユニオン・ジャック(四)を飜す濠洲聯邦(五)の民草は、砲煙漲る歐洲の天地を思うて、日夜焦躁、枕を高うして眠りかねる日が續き出した。故國に殘る親も出た。傷つく者、斃

(一)動物學者、理學博士。東京高等學校數授。明治十七年(一八四四)神奈川縣に生れた。
(二)西紀一九一五年(大正四年)五月七日ドイツ潛航艇に大西洋で擊沈された。三一五〇〇トン。乘客中百餘名のアメリカ人があつた。
(三)アメリカ人またはアメリカ政府の異名。
(四)聯合王國々旗即ちイギリス國旗。
(五)オーストラリヤ。英國の自治植民地。

れる者、銃を執るジョン・ブルの人だねは將に盡きようとする。「送れ、つは者を」「守れ、祖國を」との聲が、南十字星の輝く國を震撼させた。蹶起した壯丁を仕立てゝ、瞬く間に護國の一軍團が編成された。そして「ベルダンへ」「ベルダンへ」との聲が、怒濤の如く卷起つた。

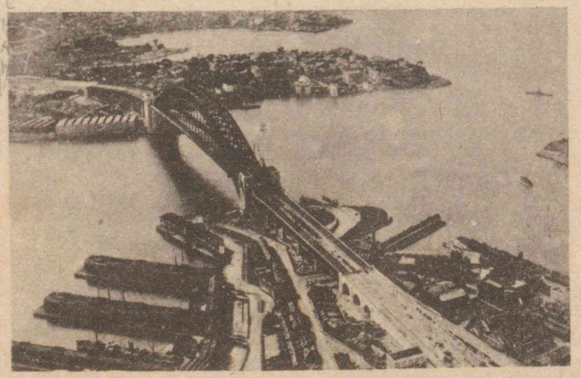
今日は戎衣に身を固めた親しき者が、海を渡つて行く日である。舳艫相ふくんだ運送船の一隊が、海に陸に涙をこめて合唱される「神よ、我が君を守りませ」の歌に送られて、錨を卷揚げた。銃を高く擧げてゐるのは、我が夫ではないか。劍を按じてこなたを見詰めてゐるのは、幾年月守り育てゝ來た我がいとし子ではないか。風光明媚を以て誇るシドニー港

(一)イギリス人の綽名。
(二)フランスのミューズズ河岸にある堅固な要塞。西紀一六九一年ドイツ戰線をフランスの突破しようとして攻撃をこゝに集中し、烈無比の砲撃を加へたが、遂に目的を達しなかつた。
(三)イギリス國歌の一節。劍を按ず
(四)オーストラリヤ南東部の港市。

をめぐる丘といふ丘に、市民は黑山のやうにたかつて、二度とは歸り來ぬであらう人々を見送つてゐる。

見よ、ユニオン・ジャックを振りかざす將士の意氣は、天を衝いてゐるではないか。愛する者に託して、愛國の熱誠を送る市民の眼は、もの凄いフランスの戰場を睨んでゐるではないか。されど征途に上る者と、熱誠をこめて送る者と、兩者の胸に宿る一抹の不安。あの劣勢な軍艦に護られて、今送る救ひの兵が、果して首尾よくフランス

意氣天を衝く



シドニー

鵬程萬里征旅の夢

銃後の人

萬事休す

の地を蹈むだらうかとの懸念が、暗雲となつて港一杯に廣がつてゐた。

勇ましくも隊形を整へた運送船隊が、波を蹴つて港口を進み出た。鵬程萬里、征旅の夢や如何にと、涙の露を浮べて遠く洋上を見詰める銃後の人の眼に、怪しや立ちのぼる幾筋の煤煙が映じ出した。一つ、二つ、三つ、四つ。マストが見える。煙突が見える。恐しい砲が見える。突如として現れた大艦隊が、二列單縱陣を作り、よろめき出た運送船隊を目掛けて、まつしぐらに突進んで來る。獨艦現る。萬事休す。港口で、眼の前で、父が、子が、夫が、海の藻屑と消えて行く。見よ、船上では、かなはぬながらもと、將士が銃を握りしめてゐるではないか。今し

慟哭する暗雲遂に雨を呼ぶ

皇威八紘に及ぶ

征途を祝した幾萬の市民は、顏をそむけて慟哭した。暗雲遂に雨を呼んだその樣は、實に傷ましい限りであつた。

來るべき時は遂に來た。運送船隊は忽ち怪しの艦隊に挾まれてしまつたが、不思議や、各艦一齊に轉廻して、各運送船の兩側にぴたりと寄添つた。何事ぞ、銃を構へた將士が、狂喜亂舞するのが眼に見えるではないか。小手をかざして眺むれば、護送するかの如く見えて、艦尾に翩翻と飜る旭日の御旗。あゝ日本。日本。日本の海軍。ブラボー。山に、丘に、埠頭に、澎湃として歡聲が涌起つた。堂々海を壓して水平線下に消えて行く艦船を眺め入つたその刹那、群がる市民の胸に、深く深くしみ込んだものは何であつたらうか。皇威八紘に及ぶ。我

等は實によき國に生を享けたものである。

或日曜の午後、筆者はシドニーの郊外に散策を試みた。埠頭を去つて數歩を運ぶその向ふから、人相の餘り良しからぬ巨大な男が寄添つて來る。事勿れと身をかはさうとする筆者の手を、彼は突然固く握つて、あいさつをした。猛鷙に睨まれた雀のやうに、けゞんな顔をして立止つた筆者の樣子がをかしかつたのか、はつはつは……と大きく笑ひながら、彼は懷から一葉の寫眞を取出した。そしてそれを筆者の面前に突附けて、「これは誰に見えるか」と問うた。軍服を身に纏うた立派な英國の士官である。「僕に見えないかね」と言はれて、始めて氣が附いて見ると、ぬつくと立つた土方のやうな男は、正に寫眞の主であつた。

「僕は大戰當時、工兵大尉として出征した。見給へ、胸間には勳章が輝いてゐるだらう。しかし、退いて考へて見ると、名譽の勳章は、僕等濠洲兵を安全に戰地に送り屆けた日本海軍が與へてくれたのと同樣だ。日本の海軍に、日本の國民に感謝したい思で胸が一杯だが、その後日本の人にはめぐり遇はなかつた。どうかこの感謝の心を受けてくれ給へ」。

と言つて、彼はまた筆者の手を、固く〳〵握りしめた。

御旗の光が此所にも照輝いてゐる。故國を後にして始め

國威を宣揚する

て知る己が祖國の力强さを。そして知らぬ時、知らぬ地域で國威を宣揚してゐる皇軍のめでたさを。

—不定芽—

二　大日本國

御祖の神の產ませし國に、
皇孫降りて君とし知らす。
寶祚は天地と窮りあらず。
この國、この君世にたぐひなし。

大君、民を子のごとおぼし、
國民、君をば親とし慕ふ。
さながら一家の睦はとはに。

とは

鎭めの山
神さぶ
國ぶり

この國、この君世にたぐひなし。

大和の國の鎭めの山と、
富士の嶺み空に神さび立てり。
貴き皇國の姿を見せて、
高きはこの山、世にたぐひなし。

日出づる國の標の花と、
櫻は霞に紛ひて咲けり。
氣高く雄々しき國ぶり見せて、
にほふはこの花、世にたぐひなし

勿來關　谷口香嶠筆

(一)福島縣(磐城國)石城郡勿來町にその關址がある。

(二)元新聞記者。名は宗次郎。文久二年(二安五年)藝國に生れた。

(三)姓は清原。寛治元年(一七四七年)則の子。義家と十一月戰ひ、捕へられて殺された。

(四)清原武貞の次子。應德三年(一七四六年)義家に殺された。

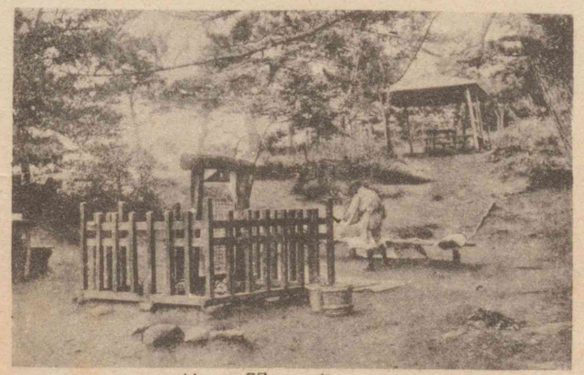
(五)源頼義の長子。八幡太郎と號した。天仁元年(一七六八年)歿、年六十八。

三　勿來の關

熊田葦城

武衡既に縛に就き、家衡誅に伏し、その黨四十八人また斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國内靜平にして、民心悅服す。乃ち留守を置きて京師に還らんとす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草馬蹄輕し。客心悠々、また戰時の秋に似ず。行き〳〵て勿來の關に差掛る。山上模糊として白きは雲か。地上繽紛として飜るは雪か。雲と



勿來關址

後三年の役に出羽の國を平定し平和となつたので義家は京都に歸るべく勿來の関にさしかゝつた。をりから彌生の花曇り春風そよ〳〵と櫻花をよろそひの袖に散らし義家は一首を詠んだ。

第一段　源義家の勿來関に於けるまでの事と一首の詠歌

第二段　都にかへつて義家大いに面目をほどこした

ゆく風さえもはいってはならぬという名のある勿來の関と思いに道もせにちる山櫻の花がちってあるわい

干戈既にをさまる

逸興頓に涌く

詩情自ら動く

見えしは梢の花、雪と思ひしは散り來る櫻。關山春深き所、心なき身も感などか起らざらん。兵馬倥偬の間にありては、月を見ても樂しからず。鳥を聞きても嬉しからず。今や干戈既にをさまりて、襟懷特に安し。將軍駒を樹下に駐めて顧望すれば、胄も花、鎧も花、身はいつしか畫中の人となる。逸興頓に涌きて、詩情自ら動く。

吹く風をなこその關と思へども
　みちもせに散る山ざくらかな

一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするも知らず。

かくて長亭短驛、日數を重ねて京に著す。百戰功を重ねて、

門前市を成す

見あきらむ

をこ

一門光を添ふ。來りて賀を述ぶる者、門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語る、「陸奥は名所多き國と聞く。年久しくかの地にありつれば、皆それ〳〵に見あきらめつらん。これのみ、こそ羨ましき心地すれ」と。義家畏まりつゝ答ふ、「心長閑けく候はんには、ゆかしき事も候べけれど、軍に暇なき身には、優しき詠とても候はず。たゞ勿來の關と申す所にて花の散る樣の餘りに興深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしかば、そのまゝにうち過ぎなんも口惜しく、をこの口吟に任せてかくなん仕りぬ」とて、かの「吹く風を」の歌をうち誦すれば、「げにも秀歌をこそ致しつれ」とて、感歎特に淺からず。

花は櫻木人は武士

(一)江戸時代の儒者。字は文祥。號は常山。岡山藩士。天明元年(一七八一)歿、年七十四。

(二)室町時代の武將。剃髮して道灌と稱した。文明十八年(一四八六)殺された、年五十五。

(三)扇ヶ谷上杉氏。

(四)後拾遺集、中務卿兼明親王の作。

花は櫻木、人は武士。この人この花を詠じて、花と人と千古に芳し。

——日本史蹟——

四　古名將の學問

湯淺元禎(一)

太田持資(二)は上杉(三)の家老なり、鷹野に出でゝ雨に逢ひ、百姓の家に入りて、「蓑を貸し候へ」と言ひしに、若き女、ものは何とも言はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、「花をくれよといふ事にてはなし」とて、腹立てゝ歸りしに、これを聞きし人の「それは

七重八重花は咲けども山吹の
みのひとつだになきぞ悲しき(四)

といへる古歌の心にて、蓑なしと申す事を、花もて知らせ申したるなり」と申しければ、持資駭きて、「我これ程の事だに知らで、百姓の娘に劣れる事口惜し」とて、それより書を讀み、歌に志を寄せにけり。

道灌卽智（小堀鞆音筆）

或時、下總の國へ軍を出しに、山涯の海邊に、山の上より石弓を張りたり。「潮たゝひたらば通り難かるべし、いかゞ」とありし時、をりふし夜半なるに、持資「いざ見て來らん」とて馬を乘出しけるが、そのまゝ歸り、「潮は干たり」とて、軍を押通しけり。これは

遠くなり近くなるみのはま千鳥
なく音に潮のみちひをぞ知る

と詠める歌ありぞそれを思ひ出して、千鳥の聲遠く聞えたれば、潮の干たるを知りたりとなり。

また退口に利根川を渡す時、これも夜半にて、暗さは暗し、いづこ淺瀨なるべきと口々に言ひけるに、持資

そこひなき淵やはさわぐ山川の
あさき瀨にこそあだ波は立て

と詠める歌あり。波の荒き所を渡せと下知して、難なく淺瀨を渡りけり。

(一)冷泉爲守の作。爲守は連歌の名家。曉月法師と言ふ。嘉暦三年(一九八八年)歿。

(二)古今集、素性法師の作。

かくの如く、昔より武將は必ず學問に心を寄せ、歌の道を知りけり。

奥州の合戰に八幡太郎義家、(一)安倍貞任、(二)宗任を攻めて、衣川の城に追詰めし時、「きたなくも後を見するかな。もの言はん」。とて、

衣のたては綻びにけり

と言ひかけしに、貞任しころを振向けて、

年を經し絲のみだれのくるしさに

と附けたりければ、義家番ひたる箭をさし外しけりとぞ。かかる烈しきをりにかく附けたる事、優に優しき事なるべし。

かくて義家上京しける後、(三)宇治の關白を訪うて軍物語しけるを、中納言匡房(一)聞きて、「器量は賢けれども、軍の道は知らず」とつぶやきけるを、義家の郎等聞きて、「憎き事申され候」と義家に申しゝかば、義家「子細あるべし」とて、匡房の中納言、車に乘りける所へ參りて、會釋ありて、やがて弟子になりて學問しけり。後三年の合戰に義家金澤(二)の城を攻めし時、一行の雁の刈田の面におりんとしけるが、俄に驚き飛亂れけるを、「兵法に『鳥の起るは伏なり。』といふ事あり。定めて伏兵あるべし」とて、野の三方を取卷きしに、案の如く三百餘の伏兵ゐた

(一)頼時の長子。康平五年(一〇六二年)歿、四十四。
(二)貞任の弟。前九年の役に源頼義に破られ、後僧となつた。
(三)藤原頼通。道長の長子。承保元年(一〇七四年)歿、八十三。
しころ(錏、鍄)

(一)大江匡房。
(二)今秋田縣(羽後國)仙北郡金澤町。

義家匡房を訪ふ(谷口香嶠筆)

(一)姓は源。義朝の第三子。天下を統一して幕府を鎌倉に開いた。正治元年(一八五九年)歿、年五十三。
(二)武將。姓は武田、名は晴信。天正元年(一二三年)歿、年五十三。
(三)武將。姓は上杉、名は景虎。信玄と川中島に戰つた。天正六年(一二二八年)歿、年四十九。
(四)武將。文祿四年(一二五五年)歿、年四十。
(五)今三重縣(伊勢國)一志郡松ヶ崎村。天正年中蒲生氏の有となつた。
(六)細川忠興。三齋と號した。正保二年(一二三〇年)歿、年八十二。
(七)後撰集卷十一、よみ人知らず。

りしを、攻破りけり。義家學問に心を寄せずば、などかゝる事を知るべき。

右大將賴朝和歌に心を寄せ、近き年信玄、謙信兩人とも詩歌を好みけり。蒲生飛驒守氏鄕は伊勢の松崎十二萬石より、奥州會津百萬石を太閤より拜領し、奥州を切鎭めたる無雙の猛將なりけれども、極めて和歌を好きけり。氏鄕の家に佐佐木の鐙と言へる名高き鐙ありけるを、細川越中守所望しけるに、家來ども「これは名物にて候。別の似よりたる鐙進ぜられよ」と申しければ、氏鄕

なき名ぞと人にはいひてありぬべし
こゝろのとはゞいかゞ答へん

(一)菊池武時。
(二)第九十六代。
(三)櫛田神社。福岡市博多紙園町にある。すくむ(竦)

といへる歌の心の恥づかしとて、かの鐙を贈りけりとなり。

元弘の亂に菊池寂阿入道が後醍醐天皇の敕命にて敵の城に寄せける時、櫛田の宮の前にて馬のすくみたりしに、

ものゝふの上箭のかぶらひと筋に
おもふこゝろは神ぞ知るらん

と詠みて、神殿の大蛇を射て馬のすくみ直り、既に討死すべき時、故鄕へ一首の歌を書附けて遣しけるに、

ふるさとにこよひばかりの命とも
知らでや人のわれを待つらん

と詠みて、忠義の爲に命を捨てけり。これ等皆文武の人と申すべし。

大將ばかりにもあらず、名高き士は皆書を讀み學問し、和歌をも好きけり。

梶原が一の谷にて、

ものゝふのとりつたへたるあづさ弓
ひきては人のかへすものかは

と詠み、賴朝の奥州を攻めし時、白河の關を越ゆるに、

秋風に草葉のつゆをはらはせて
きみがこゆれば關守もなし

と詠みけりとかやすべて學問して名高き勇士多し。文武は二つならず。詩歌を公家の玩物と思へるは、無下に口惜しき事なり。

—常山紀談—

(一)景時の次男景高。
(二)神戸市須磨區。
(三)景時の長男景季。
無下に口惜し

五　我が國往時の商工業

杉山重義(一)

明治維新以前の我が國に於ける商工業の狀態はどうであつたか。封建尚武の世の常態として、獨り武士だけが幅をきかせ、花は櫻木人は武士、商工業者は素町人と呼ばれて、人であつて人でなく、殆ど土芥のやうに輕んぜられてゐた。これは勿論社會組織の然らしめたところで、商工業家自らの如何ともする事の出來ないところであつたとは言へ、彼等はこれが爲に自暴自棄に陷り、とかく醜惡下劣な事をも敢へてして憚らないやうになり、愈、その品位を墜したのであつた。曾て神戸某外字新聞の記者某は、日本に於ける實業道

(一)教育家、經濟學者。松山市の人。昭和二年歿、年七十一。
尚武
素町人
自暴自棄

(一)ブラジルの首府。南アメリカ第二の都會。

(二)伯剌西爾。

利己心

浮む瀬もない

德の墮落を論じて、その由つて來るところは、封建時代に於て大いに商工業を輕蔑した風習にあると言ひ、また先年リオ・デ・ジャネイロに於て全米會議の開かれた時、ニューヨークのアウトルック新聞から派遣された記者は、その通信に於て、(一)ブラジル人の商業道德の甚だ低い事を論じて、その原因は、恰も日本人の場合と同じく、その有識社會の人々に、商業はその本來の性質に於て營利を目的とするものであるから、自己本位な利己心の外、他に人の能力を用ひるべき餘地がないとする考が一般に行はれてゐる爲であると述べた。古來我が國に於て商工業が非常な輕侮と虐待とを被つた結果、浮む瀬もない墮落の淵に沈んで居つた事は、普く世

慨歎の至

物窮れば通ず

一陽來復

瓦解

界に知渡つた事實で、これが今日に至るまで、我が國の進步發展の上に大なる累をなしてゐる事は、實に慨歎の至であると言はねばならぬ。

しかしながら、物窮ればまた通ずるは天地自然の道理で、維新の改革と共に、我が國の商工業にも一陽來復の春が來た。卽ち封建制度の瓦解と共に、從來獨り幅をきかして居つた武士がその常職を解かれて、四民は平等の待遇を受ける事となり、今まで輕蔑されて居つた農工商が、俄に頭を擡げるべき機運に向ふやうになつたのである。そして、廣く世界の先進諸國と交つて文明の空氣に觸れるに隨ひ、國家は決して武士の力だけで立つものではなく、商工業が社會の存

尾羽うち枯す

因習の久しき病膏肓に入る

在に必要な事は敢へて何物にも讓らないといふ理由が次第に明白となり、從來土芥のやうに輕侮されて居つた商工業は、茲にその價値を認められるに至つた。爾來文運の年と共に進むに隨ひ、一方に以前の武士が尾羽うち枯して益悲境に沈むに反し、商工業家は益世の尊敬を受ける世の中となつた。それ故、商工業家の品位もまたこれに伴なつて大いに向上すべきが當然であるが、因習の久しき、病は深く膏肓に入り、その下劣の行爲はなか〳〵一朝一夕に改らず、今日になつても、なほ商工業家自らは言ふに及ばず、世間一般の人々までが、商工業に關する行爲に就いては、他と異なる大割引の道德標準を以てこれを視、怪しからぬ行爲があつて

寛恕する

習慣は第二の天性

攪亂する

も、とかく寛恕して咎めない傾のあるのは、前に述べた通りである。抑、これはいかなる理由によるのであらうか。

これは勿論、長い間の習慣が第二の天性となつたのに相違はないが、畢竟、商工業の眞の性質がまだ十分に彼等に理解されない爲に、動もすれば商工業家の腦髓を自暴自棄の亡靈が侵して、これを攪亂するからである。商工業その物が決して賤しむべきものでない事は承知して居つても、それが非常に尊重すべきものであるといふ自覺は、まだ商工業家自身の心にも起らず、隨つて世間一般の人々もさう思はないのである。それ故、商工業家が十分にその爲すところの事業の性質を解し、その任務のいかに尊重すべきものであ

るかを自覺するやうになつて、始めて我が國商工業の改善進歩は期する事が出來るのである。

——商工道德——

自修文

一擧萬得

福田德三(一)

(一)經濟學者。法學博士。東京市の人。昭和五年歿、年十七。

抑、今日の社會に於て、富を成すとか、金を儲けるとかいふのは、果してどういふ事を意味してゐるだらうか。

昔キリスト教では、すべて安く買つて高く賣るのは罪惡であると、やかましく戒めたものである。言葉を換へて言ふと、商人が賣値と買値との間に於て利益を占めるといふ事は、いかなる場合に於ても常に惡い事であると、戒めたのである。

我々は、先づこの點からして考へてみなければならぬ。何故、商人が賣値と買値との間の開きを利するのが惡いか。この利益が

開き　差額。

なければ、商業は成立たないのである。今日に於ては、獨り商人だけではない、工業者でも、農業者でも、苟も社會の表面に立つて、生産、營利の業に從事する者は、畢竟この利益を得る事によつて存在してゐるのであり、そしてその利益が積んで富となるのである。

勿論、利益を得る方法にも色々ある分けて言へば、生産利益もあれば勞働利益もあり、投機利益もあれば射倖利益もありまた獨占的の利益も、競爭的の利益もある。利益の種類は樣々あるけれども、利益を得るといふ一事に於ては、すべて共通である。

さてこの利益なるものは、道德上いかなる意味を有してゐるか。昔は、一人が利益を得るのは、卽ちそれに相應して他に誰かゞ損をしてゐるものと看なされてゐた。若しこの考が正しいならば、我々はいかに言葉を繰返してみても、利益といふものは、道德

生産利益　財物を生産することによつて儲ける利益。
投機利益　株券などの相場を利用して儲ける利益。
射倖利益　まぐれあたりの利益。

是認　よいとしてみとめること。

上これを否認しなければならぬ。

一體、社會上、誰かに損を與へて、そして自分が利するといふ事は、決して永續すべき性質のものでもなく、また道德上是認さるべきはずのものでもない。しかし今日の社會組織は、一人が利益を得るために、必ずそれだけ他人を害さなければならないといふやうな約束の下に成立つてゐるのではない。否寧ろ、一人が利益を得れば、惹いて他人も利益を得るのである。世に一舉兩得といふ語があるが、今日に於ては、單に一舉兩得に止らず、一舉千得、一舉萬得である。卽ち、自分が或仕事を起すのは、自分を利するに止らず、更に他人をも利するので、自分が或營利事業を起さなければ、他人にも利益を得る機會を與へない事になるのである。

尤も投機的の利益に至つては、一人の利益は卽ちそれだけ他人の損を意味する事もある。それはいかなる場合にも、道德上許

一般の利益を推す　一般の利益もさうであらうと考へる。

取引所　米穀、株式、綿絲などの物品の大量取引をする市場。

廣く大局に互り　廣く全體を見渡して。

さるべきでない事は勿論である。しかし、これを以て一般の利益を推すのは間違であるし、またその爲に、投機的の利益を全然惡いものとして斥けてしまふのも、間違つてゐる。

何故なれば、或事に就いて見れば、直接には、一人の利益が或は他人の損害となつてゐるかも知れぬが、抑、かやうな仕組が世の中にあるといふ事が、間接に或は眼に見えない所、或は數年の後に廻り廻つて、誰人かを利してゐる。取引所に於ける投機に就いて見るに、甲が十萬圓を一時に儲けたとする。その事だけを取つて言へば、道德上疑問を生ずるのであるが、しかし、これが爲に取引所といふものを廢してしまふといふ事を考へたら、どのくらゐの利益を引去るものであるかを同時に考へなければならぬ。

今日の社會では、一つ〳〵の事柄を取出して、それだけで判斷を下してはならぬ。廣く大局に互り、全般に通じて、可否を決しな

ければならぬ。かう觀察すると、大體に於て、今日の產業上に於ける利益は、常に一擧千得、一擧萬得を意味してゐる。それは、他人の所有してゐるものを奪ふのでもなければ、また他人が受くべきはずのものを自分が取るのでもない。其所に何か新しい事を始めるのである。卽ち從來結び附かなかつたものを結び附ける、從來存在してゐなかつたものを產出する、從來賣出されてゐなかつたものを賣出す、從來賣れなかつたものを賣れるやうにするといふ風に、とにかく、其所に一つの新しい結合を作る。この新しい結合が、卽ち從來なかつたところの新しい價値を生ずるのである。

この新しい價値を生ずるといふ事は、新しいものを生ずると同時に起る事もあらうし、またさうでない事もあらう。今一例を取つて考へてみる。

農家が米を作るとする。さうすれば、それだけ新しい米が其所に出來、同時に、それだけ新しい價値が出來るのであるが、さうでなく、以前のまゝで形が變つただけ、否、形も變らぬが、置場所が違ふ、否、置場所も違はぬが、使ひ方が違つて來る、否、使ひ方にも違が起らぬが、それを使ふ人だけが違ふ。

これだけでも、其所に新しい價値が生じて來る。その生じた價値は、或は社會全般に、或は或一部の人に、とにかくそれだけ人の幸福を增すので、それだけ社會上の利益を產出して來る。その產出した利用の一部分は、その事を企てた人の懷へ、金錢上の利益となつて入る。またその人だけに限らず、數人の懷にも、金錢上の利益となつて入る。

この金錢上の利益が新しい價値のすべてである場合もあらうが、大抵はさうでなく、金錢で量つた利益は百圓、二百圓であつ

ても、社會に與へた幸福の增進は、これを金錢に見積つて、數百圓の價値があるかも知れない。または到底金錢で見積る事の出來ない利益をも、社會に與へてゐる場合が多い。或事を企て、或物を新たに作り出した人の得る金錢上の利益は、その事の爲に社會に與へた利益の一部分に過ぎない。勿論、商人のする事が、すべて皆かういふ風に社會に幸福を與へるものとは限らない。それは言はずともわかつてゐる。しかし大體を通じて言へば、常にかうであると斷言して差支ない。

かう考へてみると、商人が利益を得るのは、その利益を得るといふ事が貴いのでなく、社會に利益を與へる事が貴いのである。それ故、この利益を道德上惡いものと見るといふやうな事は、以ての外の考へ違であると言はなければならぬ。若しこの金錢上の利益を、道德上善くないと認めるなら、この利益を喚起す新し

道德律に觸れる　人間の從ひ行ふべきおきてに外れる。

戰々兢々として云々　正道に外れまいとして、びくびくして何事もしない。

(一)詩人、小說家。名は春樹。明治五年(一二五三年)長野縣に生れた。

い企は、全然廢さなければならぬ事になる。そしてその結果、あらゆる人をして、罪に陷り道德律に觸れるかも知れぬといふので、戰々兢々として、手を拱くばかりの退嬰的の生活を送らせる事になつてしまふ。さうなると、社會は萎靡して振はない。國富はいつまで經つても增進しない。これがヨーロッパに於て、中世數百年の暗黑時代を現出した所以である。

今日の東洋諸國が、西洋に比べて甚だ振はないのも、かやうな退嬰的な考がまだ殘存してゐるからである。

——現代の商業及商人——

六　春の一日

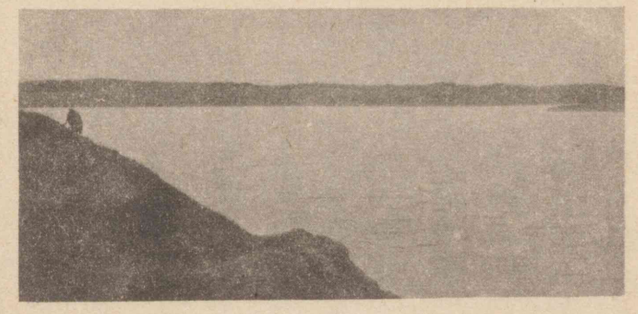
島崎藤村(一)

今年の春は雨多く、ともすれば空曇りて、快晴と言ふべき

日は少かりしを、珍しくも今日は雲收りて、空の色も眼に心地よし。かくて興も涌上り、足も浮立ちければ、友を誘ひて利根川のほとりに遊ぶ。

(一)群馬縣利根郡大水上山に發し、武藏、下總の界をなして、關東平野の大部を潤し、銚子に於て海に注ぐ。關東一第一名坂の東太河。郎。

醉ひしる恍惚



利根川

見るたび毎に新しきは、朽ちず盡きざる自然の樣なりけり。殊に雨收りての後なれば、樹といふ樹、草といふ草、げに何れも綠美しき若葉を伸べて、活々と大氣を呼吸する樣、目に見ゆる心地す。花やかに射す日の光の麗しさよ。柔かに吹渡る春の風の爽かさよ。我は醉ひしれたるが如く、恍惚としてこの景色の中を行くに、松生茂れる小高き丘あり。

幽懷を遺る

友は此所に遊ぶ事を好みて、常に來りて幽懷を遺るとかや。右に左に眺め入るに、松が根に咲出でたる一もとの花あり。蘭かと思へば蘭にはあらで、あらゝぎの花なりけり。さるにても、その花の形の畫きたらんが如く、塵も据ゑざる風情の貴さよ。とて、友は花を愛づるの情に堪へでや、摘取りて黑き帽子に挿みぬ。その花をかざして、ほゝゑみて松蔭に立てる姿は、古への物語中の人物を目のあたり見る心地さへしたり。

我等はうち連れてこの丘を下りぬ。利根川のほとりに出づれば、楊柳の花咲滿ちたり。高き岸に上りて眺むるに、遠き

一眸の裡にをさまる

山々、近き村々、何れも一眸の裡にをさまりて、携へ來りし雙眼鏡に入る桃の花の景色、えも言はず。

小貝川流れて利根に入るあたりは、左に戸田井の柳萌出でたるが見渡され、右には羽根野の漁家兩三軒岸に臨みて、物洗ふ女の様も情趣を添へたり。舟を浮べて、はえか釣らんと綸を垂れたる様、籠を背負ひ、たすきの目立ちたるを懸けたるが椿の花蔭を歌ひ行く様、煙草を吹かす農夫の心安き様、柳に繋がれたる馬のいなゝく様など、げに車東西に馳違ひ、煤煙暗く空を覆へる都の空と事かはり、かゝる田舍ならでは見らるまじき景色なり。我は友と共に此方の岸をさまよひ、彼方の堤を傳ひて、日一日、川のほとりに眺め暮しぬ。

(一)栃木縣芳賀郡に發し、茨城縣(下總國)北相馬郡で利根川に入る。
(二)(三)共に茨城縣北相馬郡。

はえ(鮠)

いなゝく(嘶)

馬を牽き、すきを肩にして歸る農夫の後に附添ひ、眺め飽かぬ川のほとりをさまよひ歸るに、俄に鳴き出したる蛙の聲に誘はれて、友の指さす方を眺むれば、彼方に立てる野の家あり。稾ぶきの屋根は春の星を帶びて、寂しき中にも深き趣を具へたるは、そもいかなる人の住めるにかあらん。

七　體育と競技

永井潛

青年は人生の春である。私は花咲き鳥啼く春の盛に於て、元氣旺盛な青年男女諸君の爲に體育を論ずる事を、無上の欣快とする。

二千五百年の昔、ギリシャ民族は世界人類の選手として、

(一)生理學者、醫學博士。東京帝國大學名譽教授、臺北帝國大學醫學部長。明治九年(一五三六年)廣島縣に生れた。

元氣旺盛

人類の選手

文化の花
試煉に打克つ
(一)ギリシャのアッチカ半島にある。第二ペルシャ戰役の古戰場。
(二)ペルシャ王。(西紀前五二一年—四八六年)
雲霞の如き大軍
(三)ギリシャのマリリス、ロクリスの兩地方の境にある狹路。
累卵の危きに救ふ
(四)ペルシャ王。ダリウスの子。(在位西紀前四八五年—四六五年)
煎じ詰めれば
(五)アッチカ半島とサラミス島との間にある灣。

燦爛たる文化を創建した。しかしながら彼等が文化の花を咲かせるまでには、どれ程恐しい試煉に打克つた事であらう。彼等は先づ、(一)マラソンの野に勝誇つたダリウスの軍勢を破つた。二度目には、(二)テルモピレーの天險に(四)クセルクセスが雲霞の如き大軍を扼した。三度目には、(五)サラミス灣頭に輕舸を放つて敵の巨艦を衝き、再び起つ事能はざらしめた。彼等はかくしてギリシャを累卵の危きに救ひ、同時に人類の文化の爲に向上の一路を開いたのであるが、彼等がこの光榮ある勝利は、煎じ詰めれば、ギリシャ青年の眞の體育の賜に外ならなかつたのである。

ギリシャ人は體育を重んじた。彼等に取つては、體育が教育のうちで最も重きをなしてゐたと言ふよりも、寧ろ體育卽ち教育の觀があつた。本來、眞善美を憧憬する事が人間の貴い本性であり、この本性を助長せしめる事が教育の根本義でなければならないのは、言ふを待たない事であるが、ギリシャ人は體育によつてこの根本義に副うた眞の教育を行はうとしたのである。

眞善美
美の極致
全智全能の神

ギリシャの國民は常に美に憧れ、調和を悅んだ。そして特に、人體美に於て美の極致が具象化されてゐる事を看取した。彼等が全智全能の神々を表すに、奇怪の形相を假らずに美なる人體を以てしたのも、全くその爲であつた。隨つて、美なる人體を假りたが爲に、彼等の作が不朽の價値ある大藝

術として今尚稱へられてゐるのである。彼等が體育の法として、裸體になり、油を塗つたのも、一つは皮膚を鍛錬せんが爲であつたが、その主な目的は、人體美を鑑賞せんが爲であつた。今日體操の事をギムナスチックといひ、中學校の事をギムナジウムといふのも、畢竟ギリシャ語のグムノス卽ち裸體といふ語原から導かれて來たのである。

門閥

ギリシャ人の正義を尊び榮譽に憧れる心は、競技を喜ぶ行動となつて現れた。競技には權威もなく、門閥もなく、財力もなく、情實もない。競技は全く裸一貫の體と體、力と力とが火花を散してぶつかり合ふのである。眞に強き者が勝ち、弱き者が負けるのである。美を悅び正義を愛するギリシャ民族が、この至純至眞で公明正大な眞劍味の勝敗から、どれ程大きな喜を得た事であらう。

至純至眞

平等一如

ギリシャ文明の基調を成してゐるものは、デモクラチックの精神であるが、運動競技くらゐ、人をして平等一如の氣分に浸らしめるものはない。競技の前には、觀る者も觀られる者も、悉く同一の興味と愛好とに溶合ふではないか。其所には身分の高下もなく、職業の差別もなく、年齢の相違もなく、あらゆる反目も障壁も、清い溫かい享樂の中に消え去つてしまふではないか。しかも鬪士が血涌き肉躍る懸命の競爭の中に、美しい意氣や、友情や、謙讓の美德が自然に溢れ出でゝ、人を魅するではないか。

謙讓の美德

人を魅する

固唾を呑む

試みに競技の光景を想像してみ給へ。先づ滿場闐として聲なく、觀衆が固唾を呑んで、息を凝して控へてゐる。やがて選手が幾千の應援者、幾萬の觀客の前に、凜々しく立並ぶ。やがて應援者は選手の心を汲み、選手は應援者の心に感激しつゝ、此所に壯烈な競技が始る。かくして行はれる競技である。勝つも涙である。負けるも涙である。鬪ふ者も涙である。觀る者も涙である。この世智辛い世に於て、世間的の利害得喪を超越した、かやうな眞純無垢の情緒の流露した光景に接するのである。これがあれ程美を愛した國民に、どれ程深い滿足と、慰安と、向上の動機とを與へたかは、察するに餘りがある。

世智辛い世

眞純無垢の情緒

しのぎ(鎬)を削る

現實化する

競技に個人的と團體的との區別がある。そして個人と個人とが兩々相對立してしのぎを削る場合に於ては、電光石火、寸分の隙も許されない。隨つてその間に機敏、果斷、克己、忍耐、廉恥、勇氣、努力などの德性を養ふ事が出來る。また團體競技に於ては、協同一致、規律節制、公明正大、責任義務などの觀念を養ひ、同胞感を高調せしめる事が出來る。

ギリシャ人はかやうな意味から、體育の中でも殊に競技に重きを置き、オリンピック・ゲームを以て、眞善美を憧憬する彼等が理想生活の中心としたのであつた。そしてまたこの有力な手段によつて、その理想を心往くばかり現實化したのであつた。

(一)羅馬。

技巧の末に走る

勝敗の數に囚はる

人格の陶冶

ギリシャの昔に於ては正にかうであつた。しかしながら、體育に於けるこの高遠な理想も、光榮ある實行も、今は昔の夢となつた。體育はギリシャの末期からローマ(一)の盛時にかけて、滔々として墮落した。そしてその唯一の原因は、人々が體育の目ざすべき高遠な理想を忘れて、徒に技巧の末に走り、勝敗の數に囚はれ、享樂の氣分に溺れ、その結果、一般的アマチュアの體育が廢れて、職業的、觀せ物的の運動となつたからであつた。かくして體育は全然眞の目的から離れて、祖國の自由獨立の爲でもなく、眞善美の追求、人格の陶冶の爲でもなく、單に一時的の享樂や賭事の具に供せられるやうになつたのである。

服膺する

今や我が國の體育は、世界の趨勢に伴なつて著しく勃興して來た。これは誠に喜に堪へない事であるが、しかしながら、徒に肉體の爲の體育、勝たんが爲の體育、享樂の爲の體育は、今より斷乎としてこれを排斥せねばならぬ。同時に、常に體育道の大精神を服膺して、眞善美を追求する心の奥底から迸り出づる眞劍味の體育を實行しなければならぬ。かくして始めて、勝敗を爭つて勝敗に囚はれず、技術を錬磨して技術に走らず、興味を樂しんで興味に溺れず、眞に人を人たらしめる所以の體育を實現する事が出來るであらう。

八喬木

萬造寺齊[1]

(一)小說家、詩人。明治十九年(一八四六年)鹿兒島縣に生れた。

日光の驟雨

見よ、すばらしい榎の喬木、
高く、美しく、堂々と
まばゆい日光の驟雨を浴み、
新生の悅に身ぶるひしつゝ
五月の空に聳え立つ。
彼の姿は地球の胸より
空へ奔騰する大噴水、
天蓋の如く綠の珠玉
珊々として滴り落ちる。
彼の姿を望む時

體現する

私は偉人の生涯を思ふ。
一つの民族の母胎より生れ、
その民族の過去の努力のすべての成果を攝取しつゝ
その民族の憧憬と、理想と、欲求と、苦惱とをおのれの一身
に體現しつゝ
時代を指導する偉人の如く、
豐饒な土壤の母胎より、
深い自然の根源より、
絕えず榮養を吸收して
鬱蒼と繁茂しつゝ、
高く、美しく、堂々と
彼は五月の野に君臨する。

星霜

進展の一路をたどる

見よ、彼の節こぶだらけの幹のおもてに
深く刻まれた幾星霜の奮闘と、努力と、忍苦との痕跡を。
しかもあらゆる困難を排し、
すべての障碍にうち克ちつ
成長の力を失ふことなく
絶えず更新し脱落して、
無限な進展の一路をたどる
彼の姿の端麗さ。
彼の力の旺盛さ。
彼は大地を装飾するもの。
彼は世界を荘厳にするもの。
まことに彼は試煉と苦悩との闇の中より
希望と光明とを生出すもの。

うから

努力と精進との不撓の精神。
おのれの性を盡して生きつゝ
從容として天命を待つ
かの曠世の偉人のうからだ。

私は聞いた、冬の眞夜中
膚をつんざく烈風の激しい突撃に對抗する彼の勇ましい怒號の聲を。
私は見た、雪の日の午後
降積む雪の重壓を昂然として反撥しつゝ空にそば立つ彼の姿を。
あゝ、傷ましい迫害と孤獨と敵意との中にあつて、
（さうしてそれがすべての偉人の運命なのだ）

血みどろの奮闘

雪を凌ぎ、嵐と戰ひ
長い血みどろの奮闘の後、
再び樂しい五月を迎へた
彼の綠のみづ〳〵しさ。
彼の勝利の華々しさ。
彼の榮光の輝かしさ。
彼によつて五月は樂しく、
世界は希望と光明とに充ちる。
彼の梢の不斷のそよぎは
疲れたものへの慰藉の言葉、
鼓舞と激勵との音樂だ。
惱めるものは此所に來つて
彼の下蔭に休むがいゝ。
彼の言葉をきくがいゝ。
彼のいのちに觸れるがいゝ。
見よ、すばらしい榎の喬木、
高く、美しく、堂々と、
傾く午後の日ざしの中に
今燦爛と光り輝く。

九　越後屋の創業

澤田　謙

三井八郎兵衞高利は無二の親孝行であつた。十四歳の時始めて江戸に出で、長兄三郎左衞門俊次に就いて商業を見習ひ、その機敏と勤勉とで忽ちにしてその店の管理を委せ

(一)評論家、傳記作家。明治二十七年(一八九四年)鳥取縣に生れた。

(二)江戸時代の豪商。三井總本家の祖。伊勢の人。(一六三五年―一七一四年)

不覺の涙を流す
奉養
(一)今三重縣(伊勢國)松阪市。
鳴かず飛ばず
(二)今東京市日本橋區。
(三)第百十二代靈元天皇の御代。(一三三三年)

られる程になつたが、故郷に空しく老いつゝある母の事を思ふと、時に不覺の涙を流す事さへあつた。

「いかに江戸で立身しようとも、老母の奉養を怠つて、それでどうして立派な人間と言へよう」。

三井高利

そして故郷松阪(一)に歸つたのが二十八歳の時。爾來二十有餘年、鳴かず飛ばずひたすら孝行の道を盡す傍、業を勵み産を興して、他日の雄飛を期した。かくして再び江戸に出で、本町二丁目(二)に吳服店を開いたのは延寶(三)元年、彼が五十一歳の時であつた。この越後屋は

(一)靈元天皇の御代。(一三四三年)
(二)今日本橋區室町。
舊習を打破する
殺到する

天和三年(一)駿河町に移つた。

「現銀安賣懸値なし」。

越後屋の店頭に掲げられた大看板は、忽ちにして江戸中の評判になつた。當時の吳服店と言へば、大抵は懸賣制であつた。代金は月末か歳末にもらふ。その代りに懸賣は懸値を伴なふ。利息や貸倒れを見込んで、二三割は正價より高く賣らなければならなかつた。ところが新しく開業した越後屋では、この舊習を打破して、商品には悉く正札を附し、代金は即時に受取る代りに、他店よりはどうしても二三割は安い。

かうして越後屋には顧客が殺到した。

更に越後屋では、分類販賣法の新法を案出した。間口六間、

濫觴

時めく
壓倒する

奥行十間の大店に、四十餘人の手代がずらりと並んでゐるが、店内では金襴は金襴、緞子は緞子と、各一種の商品を專門に取扱ふ。これは現代のデパートメント・ストアの濫觴とも言ふべきもので、手拭一筋、足袋一足にでも、少しもまごつかないばかりでなく、急ぎの客は待たせて置いて、その間に衣類を仕立てゝ渡しさへした。

「越後屋は安い上に、品物がすぐに間に合ふ」。

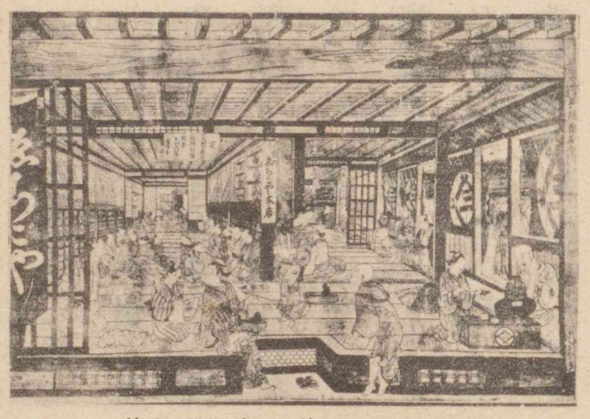
そんな事がまた評判になつて、越後屋は忽ちのうちに、本町邊に時めいてゐた吳服店を壓倒し、一日千兩の賣上を誇るに至つた。

この越後屋は、明治初年の頃まで店頭には長暖簾をおろけた(桁)

(一)江戸時代の俳人。蕉門十哲の一。江戸の人。寶永四年(一七〇七年)歿、年四十七。

横綱

し、丸に井げたの中に三の字を染めて、番頭、手代が小僧に品の出入を命ずる聲も、奥深く響き渡つたものだ。



享保時代の越後屋(奥村政信筆)

越後屋に衣さく音や更衣

(一)寶井其角のこの一句を見ても、その當時既に越後屋が、吳服業界の横綱を張つてゐた事をしのぶに足るであらう。

越後屋が今の百貨店三越の前身である事は人の知る通りである。今、日本橋の畔に立つて見ると、三越の宏壯な七層樓に並んで、三井銀行の建物がい

堅牢
分身
しつらへる

かにも堅牢さうに立つてゐるのを見るであらう。この三井銀行もまた越後屋の分身なのだ。

「どうか日本の三都に兩替店を經營したいものだ」。

それは八郎兵衛が松阪にゐる頃からの志であつたが、天和三年五月本町の呉服店を駿河町に移轉するに及び、越後屋の西寄に表間口三間一尺六寸、奥行八間の家をしつらへて、始めて兩替店を開く事が出來た。これが今の三井銀行の搖籃(ヨウラン)とも稱すべきものである。しかも越後屋は、江戸の商業が大いに振ひ、京都及び大阪をはじめ、東西の各地に支店を設ける事になつたので、それに應じて、貞享(一)三年には京都新町(二)通六角下るに京兩替店、元祿(三)四年には大阪高麗(四)一丁目に

搖籃
(一)第百十二代靈元天皇の御代。(一六八四年)
(二)今京都市中京區。
(三)第百十三代東山天皇の御代。(一七〇一年)
(四)今大阪市東區。

大阪兩替店が開かれ、茲(ココ)に八郎兵衛の三都兩替店完成の理想は實現されたのである。

そこで越後屋は、元祿四年改めて幕府へ願ひ出た、

「何卒大阪御城代(ジョウダイ)より江戸への金員送達の御用を承りたう存じます」。

「してその手數料は」。

さう問うたのも無理はなかつた。交通機關の不便な當時、山河幾百里の危險な途上に、多くのごまのはひは網を張つて待構へてゐたのだ。ところが越後屋の返事は全く意外であつた。

「手數料は別に申し受けずとも結構で御座ります」。

猶豫

「しかし、無代では商賣になるまい。」

「その代り金員上納までに、九十日の御猶豫が願ひたう存じます。」

「さやうか。よろしい。」

かうして九十日爲替の用達を始める事になつた。例へば、大阪の城代が江戸へ送る金一萬兩を大阪支店に託すと、大阪で呉服反物を仕入れて江戸へ送る。江戸の本店はこれを賣つて、九十日以内に一萬兩を幕府へ納入するといふ制度である。

この制度によつて、幕府は現金を輸送する手數と費用と危險とを免れる一方、越後屋の方では、幕府の莫大な公金を

運用する

無利息で運用する事が出來たので、これまた非常な利益を得た。以來、代官にも、諸侯にも、この制度を利用する者が益〻ふえ、隨つて三井の金融的勢力は斷然他を壓倒するやうになつた。

現在の日本の銀行制度は、明治維新後、西洋の模倣によつて發達したものであるが、その實質は遠く兩替店にあつて、しかも銀行爲替の制度さへ早く元祿年間に發達してゐたといふ事は、この一事によつても明らかであらう。

端緒

三井家が今日の富を成した端緒は、越後屋の創始した新商法にあつたが、それを大成したのは、幕府の御用爲替といふ新制度であつた。何れにしても、凡そ成功の祕訣は、新しい

道を蹈開く事にある。それは三井勃興史の第一頁を讀んでも、すぐに合點のゆく眞理であらねばならぬ。

(一)アメリカの製鋼家、慈善家。イギリスのスコットランドに生れた。(西紀一八三五年—一九一九年)

出奔する　にげる。逃亡する。

自修文

第二のカーネギーとなる道

世界の大富豪たるアンドリュー・カーネギーの事務所へ、一日一人の青年が現れて面會を求めた。彼はカーネギーの傳記を讀んで、大いに感奮して田舍を出奔して來たとの事で、ひたすらカーネギーの會社に採用されん事を願つて止まなかつた。

さて一應その青年の歎願を聞いてから、カーネギーは尋ねた、

「君には兩親は居られるのか」

「いゝえ、父が死んで、母だけ居ります」

「で、お母さんは君が出て來る事を承知されたのか」

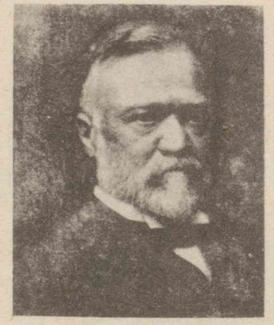
頑　片意地の強いこと。ぐわんこ。

認める　書きしるす。

「いゝえ、田舍者ですから頑で、容易に聽入れてくれません」

「ではお母さんに無斷で出て來たのぢやな」

カーネギーはじつと相手を見詰めてゐたが、やがて靜かに立上つて、



カーネギー

「それなら君に見せる物がある」

さう言つて彼は、青年を自分の書齋へ案内した。そして煖爐の上に掲げてある額を指さし、

「これを見給へ。そして其所に何と書いてあるかを讀んで見給へ」

「あゝ神聖なる母親。余が生命の親。余が教師。余が保護の天女」

と青年は讀んだ。

「その通り。そしてそれは私の母の肖像で、其所に認めてあるの

感情（こゝろもち。きもち。）

は、私の母に對する感情なのだ。私も早く父をなくしたので、母の手に育てられた。その手こそ眞の慈愛の手であつた。私は一人前になつてから、どうかしてその母の恩に報いたいと思つて、一心に母に仕へる事を志し、母に心配を懸けないやうにした。お蔭で大いに行を慎み、愉快に業務を勵み、今日の私を築く事が出來た。つまり、私は母に孝行を盡す考で、實は終生その恩にあづかつたのである。私は信ずる、親不孝の者はきつと何事にも成功出來ないと。君の志も大層立派なやうだが、唯一人のお母さんに不孝するやうな心掛で、果して何が出來よう。それよりも早く田舍へ歸つて、よくお母さんに仕へて仕事を勵むがよい。それが何より私を見習ふ事だ。そしてそのうちにきつと第二のカーネギーとなるの日が來るであらう。」

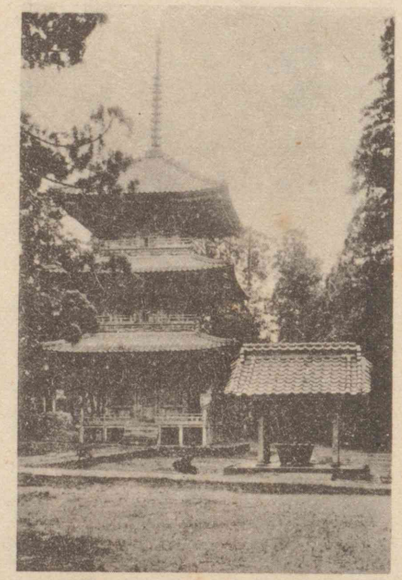
から懇々と訓戒した。

——美談逸話集——

一〇　佛の化身

相馬御風[一]

私は先頃一つのいゝ傳説を聞いた。それは越後の北蒲原[二]郡の乙村にある乙寶寺[三]といふ古刹に參詣した時であつた。その寺には有名な大日如來を安置した大日堂がある。その境内に、先年國寶建造物として指定された、たまらなくいゝ形をした三重塔がある。かの傳説はその三重塔の建立に關して、語り傳へられたも



乙寶寺三重塔

(一)詩人、評論家。名は昌治。明治十六年(二五四三年)新潟縣に生れた。

(二)新潟縣北蒲原郡。

(三)眞言宗。通稱乙寺。古刹

のである。

その三重塔の建立は慶長(一)十九年五月で、棟梁は京都の住人小島吉正である。その塔の建築には、流石に有名なこの棟梁も、心を痛め盡したと言はれてゐる。どう工夫してみても、うまくゆかなかつた。どう〳〵彼は工事半ばに、絶望の極、夜逃をしてしまつた。どこへといふあてもなかつたが、彼は唯姿を晦ましさへすればよかつたのだ。

彼は眞暗な夜路をたどつて、海岸へと出た。そして海岸に沿うて西へ〳〵と歩みを運んだ。眞暗な砂濱に打寄せる浪の音は、時にはこの世に望を失つた彼を誘ふやうにも思はれた。いつそあの暗い波間に飛込んでしまはうかといふや

(一)第百八代後水尾天皇の御代。(一六一七四年)

棟梁

うな突詰めた思も、幾たびとなく彼を襲つた。しかし、彼はやはり死ねなかつた。彼は唯むちやくちやに闇の中を歩くのみであつた。

自分の生命を打込んで工事を進めて來たあの三重塔の失敗は、苟も藝術を自己の生命とする彼に取つては、正にこの世に於ける彼の滅亡に外ならなかつた。しかも、彼はなぜかうしてその場を逃出して來たか。それを反省する時、彼は我ながらその卑怯を詛はずにはゐられなかつた。自己に對する詛は、やがて自己に對する憎しみであつた。けれども彼はその詛ふべき自己、憎むべき自己を闇の波底に葬つてしまふべく、なほ其所に故知れぬ恐怖があつた。さういふ矛盾

した心の苦しみは、唯徒に彼の心を狂はせ亂れさせるばかりであつた。今の彼の歩みは全く狂へる者の歩みに外ならなかつた。

彼の心は底知れず暗かつた。しかし、天地の闇はいつとなしにほの〳〵として、黎明の光に照され始めた。ほのかに明るみかけた大海の面では、先づ波の穂の白いのが朝の光を受けた。やがて彼の前には、果てしもなげに續いた廣い砂濱が見えて來た。光は刻一刻と土地の明るさを增して行つた。明離れて行く海には、光を歡ぶが如く波が小躍してゐた。波間に浮いてゐた鷗の胸は、銀色に輝いた。夜露にしつとりとぬれた砂濱に長く〳〵續いた彼の足跡、むちやくちやに闇

の中を歩いて來た彼自らの足跡、――それさへも今は朝の光に照されて、一條の長い路となつて現れた。

さうした朗かな黎明の大地の上に立つた彼は、今は何もかもすつかり忘れ果てゝ、唯茫然とその美に醉うた。そして倒れるやうに、彼は大地の上へ全身を投出したのであつた。

それから幾時過ぎたかわからなかつたが、夢とも現ともなく、彼は耳もと近くに子供たちの樂しさうな笑聲を聞いた。永い眠から覺めたやうに、彼はふら〳〵と起上つた。と、朦朧とした彼の眼の前に、三人の子供が砂上に坐つて、何か頻りにやつてゐるのが現れた。何といふ譯もなしに、彼はその方へ吸寄せられた。しかし、子供たちは遊に夢中になつてゐ

朦朧

るのか、彼の近寄つた事に少しも氣附かなかつた。がその刹那、この哀れな建築師の疲れ果てた兩眼には、突如として不可思議な輝きが現れた。死んだやうになつてゐた彼の全身には、不思議な生氣が充ち溢れた。

三人の子供は石を澤山拾ひ集めて來て、それを積重ね積重ねして、塔のやうな物を造らうとしてゐるのであつた。彼等は今やすべてを忘れて、その事に全心を打込んでゐる。甲が一つの石を置くと、乙は次に他の一つの石を積む。更に丙がそれに一石を重ねる。代る〳〵彼等はそれを續けて、著々として或一つの形を組立てつゝある。が、なか〳〵うまくゆかない。積むと崩れる。崩れるとまた積始める。幾たびとなく失敗し、幾たびとなく始める。しかも彼等は失望しない。倦まない。止めない。そして遂に或一つの纏つた形が出來上る。すると、彼等は共に手を拍ち、聲を擧げて喜ぶ。そして更にそれを崩して、また新たに始めるのであつた。

さうした三人の子供の遊に飽かず眺め入つてゐたかの絶望の建築師は、或瞬間に至つて、貴い何物かを獲得したやうな確信に輝く面もちを以て叫んだ、

「そこだ。その呼吸だ。その組み方だ」。

そしてさう叫ぶや否や、彼は再び狂へる人の如く、もと來た路へと駈戻つた。——

さうした事があつて、漸くの事で出來上つたのが、今日見

端嚴微妙な姿

化身

附會

るが如き端嚴微妙な姿をもつた乙寶寺の三重塔であると言ふのが、傳說のあらましである。しかも、傳說はそれに附加へて、その三人の子供は大日堂の大日、藥師、彌陀の化身であつたと言ふのである。

「智慧は私たちを子供にかへす」とパスカル(一)は言つた。私たちは更に「子供は私たちをほんたうの智慧に導く」とも言ひ得よう。乙寶寺三重塔の傳說は、私にさうした貴い暗示を與へる。「子供は佛の化身であつた」と言ふその傳說の附會をも、私はそのまゝ受容れるに躊躇しない。さうだ、すべての幼兒は神の權化であり、佛の化身である。

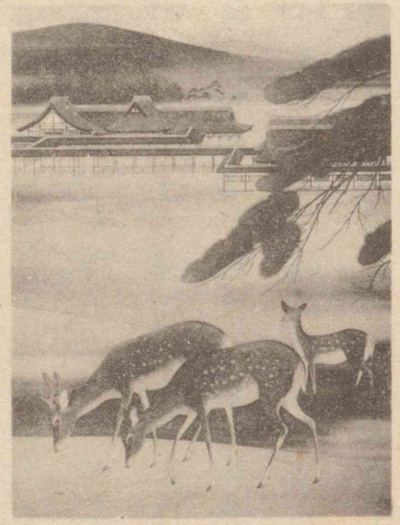
(一)フランスの數學者、物理學者、哲學者。(西紀一六二三年—一六六二年)

一一　趣味の嚴島

五十嵐　力(一)

趣味の眼から見た嚴島(二)の中心の味はひはどこにあるかと言へば、我等は第一に、彌山(三)を背景として立つた低い廣い美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めた所にあると思ふ。

先づ藝州本土の對岸から船を傭うて、ぎい〳〵と艪の音面白く漕出でる。靑一色で塗潰したやうな恰好のよい島だと思ひながら漕いで行くと、その一色の中から、違つた色彩の社殿や堂塔が、次



嚴島（山口玲瀛筆）

(一)國文學者、文學博士。早稻田大學教授。明治七年(一八七四年)山形縣に生れた。

(二)廣島縣(安藝國)佐伯郡。日本三景の一。

(三)島の中央にある。高さ五二五メートル。

第に著しく浮出て來る。初には木片を立てたやうに見えた鳥居が、だん〳〵と大きさを加へて來る。また漕ぐ程に、鳥居も、社殿、堂塔も、益〻大きさ鮮かさを加へて來る。そのうちに次第に進んで大鳥居の下に來ると、我等は覺えず驚の目を見張るであらう。見よ、目の前には高さ九間、棟の長さ十三間、地軸とも天柱とも言ふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨がつてゐるではないか。向ふを見ると、青雲の中に沖つた彌山の麓には、二十幾棟の社殿が美しく左右に延びて、赤い柱や、緩やかに反つた檜皮ぶきの神々しい姿を、水面に映してゐるではないか。その色彩を見よ。形狀を見よ。一つ〳〵の建物の整つた姿を見よ。多くの建物が廻廊や橋に繫がれて、美しい

檜皮ぶき

釣合を表してゐるのを見よ。何といふ美しさ、氣高さ、神々しさであらう。

社殿の中心たる本社は寶殿である。寶殿の左右には、百二十七間といふ長い廊下が繞らされて、その間に百八つの神寂びた鐵の燈籠が釣つてある。この寶殿を中心として、檜皮ぶきや瓦棟の多くの建物が、朱塗の圓柱に支へられて、低く美しく並んでゐる趣。縱向、横向、色々な社殿が仲よく馴染んで、大鳥が翼を廣げたやうに横長に建つてゐる趣。更に晝は鮮かな色と美しい形とを細かに見せ、夜は百八の燈火——白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚

物々しい

しび（鴟尾）

長のすくやかな姿を見せ、滿潮には波の上に浮んだ龍宮城の幻のやうな光景を見せる趣。これ等のすべてが、何とも言はれぬ調和をなして、緑の山と白波の海との間に鎭まつてゐる趣。高さ、大きさ、物々しさ、荒々しさは、前後の護衞者たる山や、海や、鳥居に讓つて、社殿自らは千木も、堅魚木も、しびも、しやちほこもない尋常な檜皮ぶきを、朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横たへてゐる趣。この重疊累積した美しさ、ゆかしさを、何に譬へようか。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんな事を考へる。設計者の鬼神は、海底で出來上つた龍宮城を、嚴島のあの入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。靜かにせり上るの

凝視する

恰好な立脚點

活動的

を凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計らつて、此所だといふ所で、ぴたりとせり上げを中止させたであらう。そしてこれを眺める恰好な立脚點を、今の大鳥居の位置に定めたのであらうと。

——甲鳥園隨筆——

一二　さわやかな心

河野省三[一]

（一）倫理學者、文學博士。國學院大學長。明治十五年（二五四二年）埼玉縣に生れた。

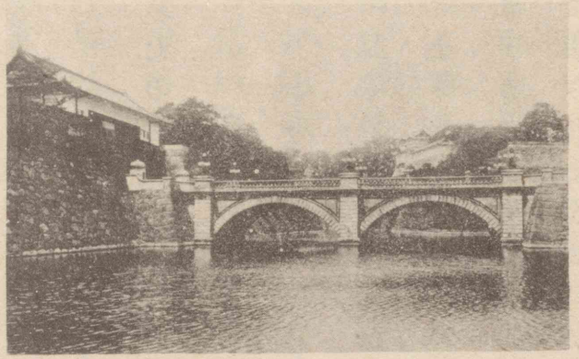
私どもは、晴れた日に東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるのであります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然に晴々した雅やかな氣分になるのであります。日の丸の旗がひらひらと飜つてゐるのを見ますと、其所に活動的な生き〳〵と

(一)東京市澁谷區代々木に鎮坐。官幣大社。明治天皇及び昭憲皇太后を祭る。

清々しい

神聖

した氣分が起つて來るのであります。或はまたかの明治神(一)宮に參拜致しまして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居を潛り、清淨な參道を吸ひこまれるやうに進んで、清い水で手を洗つて御社殿前に參りますと、おのづから清々しい尊い氣分に包まれて來ますし、更にまた松の綠の滴るお濠の邊に立つて、我が皇室の御隆盛を思ひますと、何とも言へぬ神聖な氣分が湧上つて來るのであります。



宮城御正門

心の姿

純眞な心

眞髓

美化する

これ等の神々しく、清々しく、晴々しい心持こそ、實に我々日本人が、遠い〳〵昔から養つて來た心の眞の姿であります。建國以來、私どもの祖先が育て上げて來た純眞な心は、全く我が國民性の本質でありまして、いはゆる大和魂の眞髓であります。かゝるさつはりとした、廣い、しかも力强い氣分の充ち滿ちた心が、卽ちほんたうの眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとくさわやかに
もたまほしきはこゝろなりけり

とお詠みあそばされてありますが、このさわやかな心こそ、取りも直さず、かやうな純にして直なる氣分に外ならないのであります。私どもが、この世に於て毎日々々の生活を營むに當りましても、最も大切な氣分であり、且價値のある態度は、誠にこのさわやかな心であります。

屈託する

このさわやかな心は、晴々しい廣い心持であります。徒に物に屈託しない、ゆつたりとした心であり、また妄りに他を排斥しない、穩かな心であります。この心からして、偏りのない、さわやかな氣分を味はふ事が出來るのであります。

さわやかな心は、明快な、裏表のない心持であります。世の中では、溫かみのある生き〳〵とした生活が最も望ましいのでありますが、僞らない、正直な、天眞爛漫な態度が、最も力強い生活であります。宗教の生命もまた此所にあると信じますが、天眞爛漫は卽ちさわやかな心の本體であります。

天眞爛漫

建設的
有意義
積極的

さわやかな心は、かく清らかで溫かみのある生き〳〵とした心持でありまして、建設的に、有意義に、すべて物を生かして行くところの積極的精神であります。いはゆる朝日の豐榮昇る氣分が、卽ちこのさわやかな心の働であります。

根柢

私たち日本人は、かういふさわやかな心を根柢と致しまして、この尊い國體を築き上げ、この立派な國民道德を形づくつて來たのであります。我が日本人の國民精神の現れである神道は、卽ちこのさわやかな心を、その根本としてゐる

のであります。神道に就いては古來色々の說がありますが、畢竟するに、このさわやかな心、純眞な氣分に生きるところの日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。

傳統的信念

看破する

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五十年前に、伊勢國松阪(一)にあつて、當時の學界を風靡した本邦空前の大學者本居宣長であります。この宣長の詠んだ有名な歌に、

(一)今三重縣松阪市。

敷島のやまと心を人問はゞ
　あさひに匂ふ山ざくら花

といふのがありますが、この大和心も、まさしくこのさわやかな心の姿をたゝへたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髓を發揮すべく努力した人であります。力を極めて、この日本人のもつてゐる心の本來の姿に存するところの感情の麗しさ、眞心の尊さを說いた人であります。さうしてひたすらに、我が國家を愛する道を、力强く主張した人であります。

たゝへる

ひたすら

特長

朝日に匂ふ山櫻花は、いかにも淸らかであり、さうして單純に、さつぱりした眺であります。嫌味とか毒々しいとかいふ所のない、淸い雅やかな姿であります。其所に私ども日本人としての心の特長が現れてゐるのであります。私たち日本人の祖先は、かういふ心持を明るく、淨く、直き心とも申し

一途に

經典

まして、道德の根柢となる心は此所にあると信じて居つたのであります。

かゝるさわやかな大和心を本質とする神道は、唯この雅やかな心を心として、一途に我が皇室を尊び、我が國家を愛したのでありますから、神道の信仰が人性の自然に存してゐる事は、明らかな事實であります。すべて神社は我が神道を形に生かした經典でありまして、かの鳥居といひ、御社の構造といひ、その他境内の諸建築から庭園樹林に至るまで、何れも皆清淨簡素といふ事を尙んでゐます。其所にお參致しますと、私たちの心は、おのづから清々しく、さわやかになるのであります。殊に五十鈴川の清い邊に、二千年の昔から

情操

拜誦する

大御心

鎭坐まします皇大神宮に詣でますと、何人も西行法師と同じやうに、「なにごとのおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるゝ」といふ感じに、打たれるのであります。この何とはなしに感じられる尊い心こそ、卽ち日本人の神に對するありのまゝの姿であり、最も氣品の高い宗教的の情操であります。明治天皇の御製の中にも、

淺みどり澄みわたりたる大空の
　ひろきをおのが心ともがな

といふのがありますが、この氣分こそ最も大切なのであります。この御詠を拜誦致しますと、いかにも清らかにさわやかな大御心を、しのび奉らざるを得ないのであります。

因む

(一)京都市伏見區桃山町。明治天皇と昭憲皇太后との御陵のある地。

思へばもう二十年の昔の事になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話をもつて居ります。それは明治天皇の御一年祭の行はれた時の事でした。或小さい田舍町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山(一)の方へ向つて祭壇を設け、程よく隔つた所に並びました老幼男女は、その町長をはじめとして、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。その式に後れた町民たちは、何れも靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に一人、年の頃は五十ぐらゐの八百屋さんがありました。つゝましやかに祭壇の前に立つて伏拜みましたが、やがて徐かに、左の小脇から綺麗に束ねた一束のしやうが

しやうが一生薑

を取出しまして、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一歩退いて一禮して立去つたのであります。これを目擊しました私は、誠に涙ぐましい感に打たれたのであります。

眞價を發揮する

皆さん、私たち日本人の心の底には、かういふ飾氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心がたゝへられてゐるのであります。私たちはこの心を日々の生活に移しまして、物を清らかにし、心をさわやかにして、僞のない力強い社會を築いて行きたいと思ふのであります。私はこのさわやかな心を基礎とした生活を、常に、快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活で眞面目な所に、一番よくその眞價を發揮するものが

あると信じます。

——ラヂオ講演集——

一三　朝

川路柳虹[一]

朝は晴れたり、友よ立て。
空ははるかに色澄みて、
高きおもひにくもりなき
聖者のひとみしのばしむ。

朝は晴れたり、口すゝぎ、
この曉のうまれゆく
空のさなかに神ありと、
靜かにおもへ、汝が胸に。

(一)詩人、美術評論家。本名誠。明治二十一年(一八八四年)東京市に生れた。

聖者のひとみ

日に照されて煙るもの、
とほき山なみ、町の屋根。
今勞働のほめうたの
さけびとも聞く汽笛の音。

朝は晴れたり、いざ立たん。
われら賴むはみづからの
いとなみつくる力のみ。
いざわが路をふみゆかん。

——修養文藝名作選——

一四　夏の小暦

田山花袋[一]

七月初旬の曇天は、續いて月の末に至る事あり。また中旬

(一)小説家。名は錄彌。群馬縣の人。昭和五年歿、年六十。

より晴れて、赫々たる炎威を恣にする事あり。茲に至りて人は始めて夏の暑さを感ず。

赫々たる炎威

夏は曇りたるより照りたるぞよき。碧空に日の光きらゝかに輝きて金をも鎔さん日、靜かに机に向ひて書を讀むも興なきにあらず。黄塵の堆き裡におのが業に勤しむも、またおのづから樂しみあり。芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞きつつ、靜かに華胥に遊ぶ暇あらば、いかに嬉しからん。

華胥に遊ぶ

日の暮るゝを待ちて檐の岐阜提燈に火を點じ、緣に花ござ敷きて、團扇搖かしつゝ一家だんらんの物語に耽る、眞に得難き夏の賜なるべし。闇の夜にてもよし。空に閃く星の影を數へて、北斗の所在などを指さし合はん。月あらば更によし。梧桐、寒山竹の間より、研澄したる鏡の如き光を仰がんには、晝の暑さも忘れ果つべし。

ござ(蓆)

だんらん(團欒)

幼き頃田舍にゐて、垣根の杉などを手折り來て、古擂鉢に灰少し入れて、蚊燻したる事を想ひ起す。蚊遣火は趣深きものなり。其所とも知らぬ森の中に、ゆくりなく立昇る蚊遣の煙、此所にも人住めりやと懷かし。

ゆくりなく立昇る

夏の旅殊にをかし日盛の二三時間を、松並木の涼しき休茶屋に寢て過し、朝と夕とに歩みても、日永き頃なれば、冬の日よりも却つて長き里程を歩み得べし。田舍路の休茶屋などに、清き水涌出でゝさうめんを冷したる、食指おのづから動く。

さうめん(素麺)

食指動く

一望天下を小とす

(一)長野、岐阜兩縣の境に跨がる休火山。最高峯劍峯は御嶽神社の奥院がある。高さ三〇六三メートル。

(二)長野縣の南部、木曾山脈中の山。高さ二九五六メートル。

(三)長野、富山兩縣の境に跨がる。高さ二九三三メートル。

(四)長野、岐阜兩縣の境に聳え、御嶽の遙か北方に位する。高さ三一八〇メートル。

(五)富山縣の東部にある。高さ三〇一五メートル。

登山も夏の面白きものの一つなり。輕裝して都を出で、遙かに連山の蒼翠を望む、心既に白雲の上にあり。登山の快は絶巔に登り得たる時にあり。これ言ふを俟たず。されど絶巔に至るの努力も、また一快なり。喘ぎ〳〵登るに、森林盡き、草原盡き、高山植物盡き、遂に岩石磊々たる所に達す。一望誠に天下を小とするの思あるべし。登るべき山は、富士山をはじめ木曾の御嶽(一)、駒ケ嶽(二)、更に日本アルプスの雄峯たる信濃の白馬嶽(三)、槍ケ嶽(四)、並びに越中の立山(五)など、なほ到る所多し。

海もよし。山もよし。山ならば老樹深く、溪流清く、嵐氣肌を襲ふ所、殊によし。海ならば絶海の邊、怒濤天を衝く邊に行くを要す。世の常の海水浴場など、徒に暑さを增すの料たらんのみ。

雨沛然として到る

七月中旬乃至下旬より晴れたる空は、年によりて多少の相違はあれど、十五日乃至二十日續くべし。この照によりて、稻もその株を分蘖せしむ。この照、この暑さの稍緩む時、卽ち土用のあけ頃より、低氣壓襲ひ來りて、夏の雨頻りなり。

夏の雨は驟雨性を帶ぶ。忽ち晴れて美しき空現れ、日の光射すかと思へば、白き黑き雲忽ち襲ひ來て、雨沛然として到る。物干竿の衣を取入るゝ暇もなし。その雨量比較的に多く、所によりては河水氾濫し、鐵道不通になる事も往々にしてあり。

氾濫する

この雨晴れて秋氣到る。殘暑なほ凌ぎ難けれど、樹間、叢裡、

既に秋の聲あり。梧桐、芭蕉は殊にこの聲を聞くに佳し。歐陽修が秋聲賦の思ひ出さるゝはこの頃なり。

秋の聲　(一)支那宋代の詩人。神學者。宗の熙寧五年(西紀一〇七二年)歿、年六十六。

雲の色と態と稍趣を變ふ。奇峯漸く少く、白き雲多し。夜、稻妻の遠く光るもこの頃なり。一閃毎に闇の中の雲の姿を明らかに辨じ得たる、言ひ知らず面白し。

田の面には涼しき風吹渡る。

—花袋小品—

一五　山嶽の日本

大町桂月(二)

(二)文學者。名は芳衛。高知市の人。大正五年四十七歿。

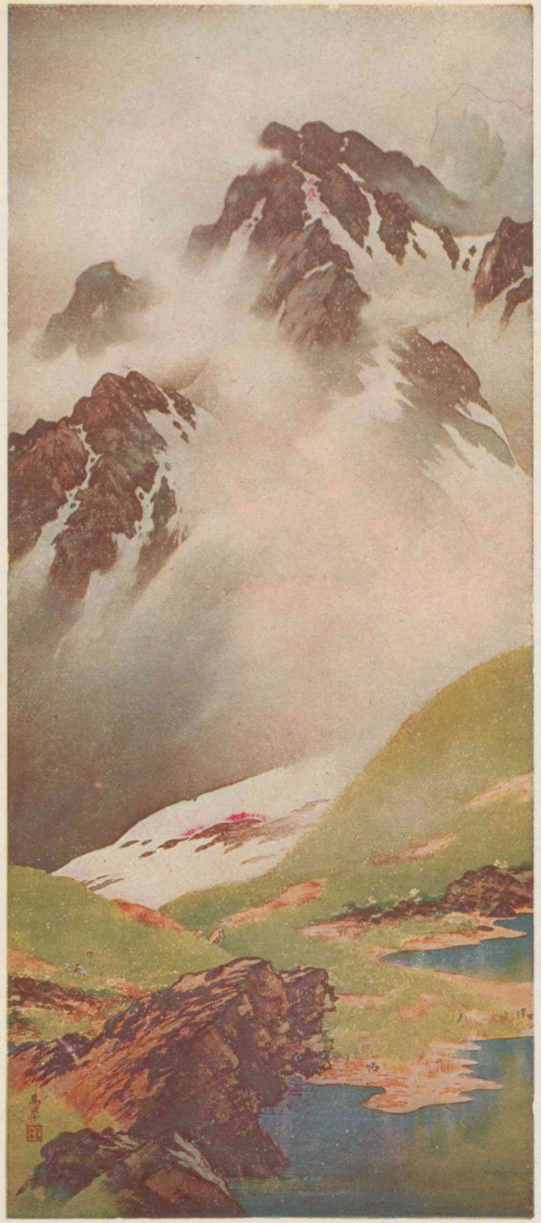
英國も島山の國なるが、英國の山はすべて千五百メートル以下なり。我が國には三千メートル以上の山嶽、富士山を始めとして二三十座あり、二千五六百メートルの山嶽は百座

座を下らず、千五六百メートルの山嶽は一々數ふるに遑あらず。山嶽の爲に土地を狹められたりとは、誤つて横より勘定したるなり。山嶽には皺曲多くして、山嶽あるが爲に日本の面積は鳥瞰の面積に數倍するなり。日本國民は米を食ふ人種なるが、その米を得るは山の恩なり。山あるを以て川あり。川あるを以て水田あり。水田あるを以て米あるなり。

鳥瞰

活火、休火、何れの火山も支那になく、朝鮮にもなくして、東洋にては日本のみにあり。富士山を始めとして、日本の名山には火山多きなり。火山あるにつきて山湖生ず。十和田湖(一)、中禪寺湖(二)、蘆ノ湖と數へ立つれば、一百を下らざるべし。琵琶湖は偉大なれども平湖なり。平湖は濁り、山湖は澄む。平湖は下界

(一)青森縣上北郡十和田山上にある。
(二)栃木縣日光山中の男體山麓にある。



山嶽の爽氣　山元春擧筆

及ぶべくもあらず

ぶな（橅、山毛欅）

はひ（偃）

と連なれるが、山湖は山に圍まれたる仙境なり。夏涼しくして蚊も居らず。風聲雲色、草木禽獸すべて下界の比にあらざるなり。唯山湖は富士以北に集れり。且山上僻遠の地にあるを以て、普通の旅客の目に觸れず。世上大多數の人は、未だ山湖の美を知らざるなり。山異なるにつれて、頂上も色々に變化す。下界より眺めたるのみにては、想像の及ぶべくもあらざるなり。

平地ならば、北すること數百里にして見る草木風色を、山嶽ならば登ること數里にしてこれを見る。造化は一種の縮地術を山嶽に行へり。瘠土に生長する赤松の森林いつしか盡きて、ぶな帶となり、橅帶となり、終に、はひ松帶となりて樹

お花畑

星の光と映發す

木盡き、その上にはお花畑の奇花異草、平地にては見られざる鮮麗なる色を帶びて、これも平地にては見られざる星の光と映發す。山高ければ高き程空氣清らかになりて、紫外線直射す。それ故に高山植物の花の色は美なるなり。願はくは、高山植物の花をして、永へに天上にあらしめよ。下界に移さば、或は枯れずとも、高山の上にて見る如き色澤は得られざるべし。

生色

山嶽に登れば平地にて見られざる樹木多く、塵を帶びずして生色あり。雲にぼかされて幽趣あり。巖に生ひて奇姿を呈す。松も黑松、赤松は平地にても見らるゝが、山に入りて姫小松を見る。この樹は他の樹木の生え難き所に生ゆ。巖と巖

との間に寸土を求むるにあらず、その根よく巖を穿つなり。根に苦勞するを以て、その葉小なり。その葉小なるを以て、姫小松の稱あり。楓も巖に生ず。滿山皆花といふ光景は、實際には見られざるが、滿山皆錦繡といふ光景は、關東以北到る所の霜葉に見る。登り〳〵てはひ松を蹈むに至れば、ほつと一息つく。樹木盡くると共に、頂上遠からざるなり。はひ松を越えてお花畑に入れば、この世ながらの神苑なり。はひ松を蹈みてお花畑に入りたる者にして、始めて高山に登りたりと言ふべく、花の眞の美を味はひたりと言ふべきなり。

山靜かにして太古に似たり

山靜かにして太古に似たる所、幽禽の和鳴を聽けば、仙樂を聽く心地す。下界にては春にのみ聞く鶯の聲を、山上にては夏も尙聞く。下界にては杜鵑啼く時には鶯は啼かざるものなるが、山上にては鶯と杜鵑と合奏す。駒鳥最も早く起きて啼き、嶽雀お花畑に仙趣を添ふ。はひ松の絶間に雷鳥の子を連れて歩く樣は、世にも可憐なるかな。

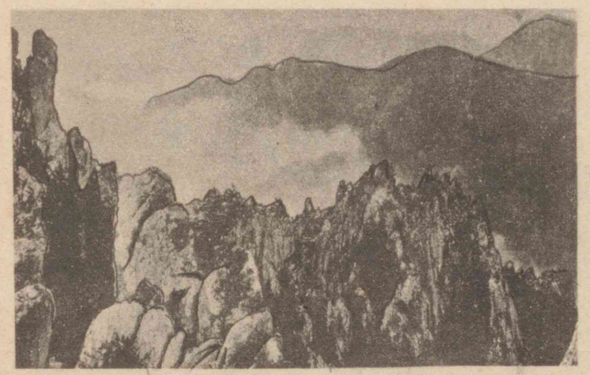
お花畑の雷鳥（玉井敬泉筆）

平地の水は、海の怒濤巖を打ち、川の細波岸を嘗むるくらゐの事なるが、山嶽に入れば水の樣千變し、水の音萬化す。山中の水はすべて淸きが、或は飛び、或は落ち、或は激し、或は散り、或は懸り、或は垂れ、或は躍りて、怒るあ

り、叫ぶあり、泣くあり、笑ふあり、歌ふあり。單に瀑布を以てするも、直下するあり、巖を傳ふあり、急斜面に激動するあり。溪ありて山益〻幽に、瀑布ありて溪益〻奇なり。

名にし負ふ

(一)江原道。大白山系に屬し、花崗岩から成る奇巖怪石を以て名高い。



外金剛萬物相五峯山

奇巖怪石は海邊にも見らるゝが、山に多し。名にし負ふ槍ケ嶽の槍も、連山の上に傑出せるを以て、その價値あるなり。妙義、耶馬、朝鮮の金剛山(一)の奇巖怪石雲上に重疊する趣は、山ならでは見られざるなり。

平地にても雲煙は見らるゝが、その妙を極むるは山嶽に

あり。白雲馬頭に生ずるも山なり。脚下に雷鳴を聞くも山なり。下界海となり峯尖島となる雲海の壯觀も、山ならでは得られざるなり。

白雲馬頭に生ず
脚下に雷鳴を聞く
雲海

日出、日沒の美は海邊にても得らるゝが、高山より見れば尚一層美なり。雲海の底より日輪の躍出する有樣、世にも崇高の美を極む。唯これ天照大神、天の岩戸を出で給ひて、天地忽ち明るくなりたるも、かくやと思はるゝばかりなり。

——近年の我輩——

(一)評論家、思想家、文學博士。樗牛と號した。山形縣の人。明治三十五年(一九〇二年)歿、年三十二。

一六　夕陽の美

高山林次郎(一)

夕陽の美は、西洋ではあらゆる美中の最も美なるものの

一つとして數へられてゐる。それで苟も自然の美に興味を持つてゐる詩人は、皆口を極めてその美を歎賞してゐる。(一)ベーンのやうな學者ですら、その心理學書で、美しいものの例に、夕陽と星と百合の花との三つを擧げてゐる。我が國の文學にも、夕日影(スウヒカゲ)とか、夕映(ユウバエ)とかいふ文字は見えてゐるが、その崇大な光景を想はしめるに足る名篇玉什の極めて少いのは、聊か不滿足に感じられる。

夕陽は麗しいが、その中にも、海の夕陽程麗しいものはあるまい。自分は奥州の西(二)海岸に育つた者であるから、海の日沒の景色は、自分には牢固たる印象を留めてゐる。あの夕べの雲の色々なたゝずまひ、それに映(ハ)えうつれる夕陽の光の

(一)スコットランドの心理學者。(西紀一八一八年—一九〇三年)

夕映

(二)その生地は山形縣鶴岡市である。

濃き淡き、それに伴なつて大海原の色々に彩られたる、これ等の一切が、日の傾くに連れて形も色もそれ〴〵變り行く有樣、殊に大空の色の暮行く工合などは、繪にも筆にも現し盡し難い。

海の夕陽に對して自分の起す感情は、常に「平和」である。譬へば、世界のあらゆる障碍にうち勝つた大勇者が、今(ノーマ)方(マサ)にその最後の戰鬪を後にして、榮光と平和とに擁(ヨウ)せられながら、靜かにその墓門(ボモン)に凱旋するといふやうな趣がある。夕陽の景色はいかにも崇大光明ではあるが、その全體の上に、どことなく疲れ憊(ノカ)れた老衰(ロウスイ)の趣のある事は、自分にはどうしても爭はれない感情である。これを譬へば、朝日の景色の萬づ

兩々相對して

生き〳〵として、今將に戰場に上らうとする初陣の勇士の概あるに比べれば、兩々相對して、さながら人生の兩極端を現示してゐる趣があるではないか。

あゝ人や、その青年は朝日の如く、その晩年は夕陽の如くありたいものではないか。爭を經ない平和には、平和たる價はない。我等は一生の戰鬪にうち勝ち、榮光の雲に包まれて、靜かに西方の天に入りたいものではないか。あゝ海の夕陽は麗しいが、海の夕陽に似た人生の晩年は、更に麗しからうではないか。

——樗牛全集——

一七　偉人野口英世

(一)醫學博士、理學博士、ドクトル・オブ・サイエンス。ロックフェラー醫學研究所部長。昭和三年歿、五十三。

(二)アシャンチといふ州の黃金海岸に面する小邑。

聲明書

「細菌學者野口英世の死によつて、我がロックフェラー研究所は、その最も卓越せる獨創的科學研究者の一人を、その最も敬愛されてゐる共働者の一人を失つた事を、世界のすべての人々と共に痛惜する。」

野口英世

世界の醫聖と謳はれ、全人類の慈父と仰がれた野口英世博士が、西アフリカ、アクラの海岸に恐るべき黃熱病研究の犧牲となつて斃れた翌日、博士が籍を置いたロックフェラー研究所は、世界の學界に向つて以上の如き聲明書を發表した。

アメリカのイブニング・ポースト紙は「博士は日本に生れたとは言へ、その功績よりすれば全人類のものである。博士

の勇ましい獻身的生涯は、現代の範とするに足る。眞に博士の抱いてゐた理想は、自分を犧牲にして濟世の道を歩んだ聖者のそれの如きものである」と、その長逝を哀惜した。

濟世

世界人

誠に博士野口英世は、日本を鄉國とする世界人であつた。國境を越え、人種を超えて、研究貢獻した博士の卓越した學勳は、千載遠く傳ふべきものである。

不滅の文獻

博士は病理細菌學の專攻學徒として、その研究の範圍は殆ど全世界に亙る廣汎なもので、研究發見の報告は實に百七十五篇の多きに上り、その多くは不滅の文獻として、全學界の至寶となつた。

博士が終生の研究道場としたロックフェラー研究所は、アメリカの富豪ロックフェラー氏の美擧によつて設立されたもので、現代科學界に雄飛する醫學の王國の觀がある。此所に集められた醫學者は、悉く各國の醫學界に萬丈の氣を吐く權威である。野口英世博士は恩師フレキシナー博士に選ばれて、その創成の業を輔けた。たとひフレキシナー博士にその異常の天才を早くも認められたとは言へ、また學界多年の謎であつた蛇毒の研究にアメリカの科學界を驚歎させたとは言へ、異邦白面の一醫學者が、かうした所へ乘出して來た事その事は、アメリカ醫學關係者の驚異の的であつたに違ない。時に博士はなほ二十八歲の弱齡であつた。爾來二十餘年、博士の鏤骨彫身の努力は、醫學者としてのあらゆ

(一)西紀一八三九年ニューヨークに生れ、一九三七年に歿した。西紀一九二七年巨額の基金を投じて、人類の幸福增進を目的とするロックフェラー財團を興した。

(二)ドクトル・オブ・メヂシン。ロックフェラー醫學研究所長、米國學術會議委員長。(西紀一八六三年——)

白面の一醫學者

驚異の的

鏤骨彫身

かつ(贏)

超人間的

る最高の名譽をかち得るに至つたが、到底人間業とも思へぬ程の驚くべき精力と智力と根氣とを籠めたその廣汎深遠な研究發見の跡は、いかなるこの世の讃辭を以てしても、語り盡し得ない。

フランスの一新聞紙は博士を讃へて、「日本の生んだ近代の驚異」と言つた。事實、超人間的の偉大なその業績は、博士の生涯を飾つて永遠に輝く。それと共に、日本人が學術的に世界を壓倒し得る事は、博士によつて明らかに立證された。科學にとかく冷淡な傾のある日本人中に、圖らずも博士のやうな偉人が出現したのである。されど博士を生んだのは日本の國土であるが、彼を磨き、彼を鍛へて、限りない光榮を人類愛の上に享けしめたものは、實にロックフェラー研究所であつた。これを思ふ時、科學の尊重を高唱する心が頓に涌き、科學者に對する敬意を昂むべき必要を痛感するのである。

冷徹明澄

科學の使徒

博士は地球を墳墓として冷徹明澄の理性を深め、苦闘精進した科學の使徒であつた。しかもその餘影には、聞くもゆかしい數々の挿話がある。博士は生涯日本人である事を誇つた。そして故國をしのび、鄕黨を思ひ、殊に骨肉を慕つた。日本を出でゝ十六年、繁劇な公務に縛られ、

勃々たる研究心

勃々たる研究心に驅られて、日本學界の幾たびかの招聘、先輩知友からの切なる慫慂にも應ずる事が出來ず、遂に歸朝の機會を捉へ得なかつた博士は、一たび故國から送られた一片の年老けた母

慫慂

倉皇として故山

堂の小影に接するや、倉皇として歸來し、故山に母堂の健在を喜んだ。博士はまた舊恩の人に絶大なる敬意と感謝とを常に捧げた。その少年の頃、學僕となつて恩寵を受けた舊師に對しても、既に學界の高き權貴に立つ博士は、なほ生涯昔ながらの呼捨を以て呼ばれる事を求め願つたといふ。或は母校猪苗代高等小學校以來、薫陶後援到らざるところなかつた良師に對しては、「自分は若しかの人に見出されなかつたら、牛追太郎で一生を終つたであらう」と、終生その恩に感謝したといふ。これ等は共にその人格の麗しさと清らかさとをおのづから感じさせる話柄ではないか。

(一)福島縣(岩城國)耶麻郡猪苗代町。

椰子の森繁る南米(二)エクアドルのギャヤキル市に立つ青銅の標面に、

(二)南アメリカ西北部の共和國。

猖獗を極める

天職に殉ずる

「一千九百十八年七月二十四日、ロックフェラー研究所の所員、ヒデヨ・ノグチ——日本の細菌學泰斗——黄熱病の原因を此所に創めて見出す。」

野口英世の生家

とある。先驅の勇者は業半ばにして悉く斃れたが、南アメリカ大陸百千年の繁榮の途は、かくして開かれたけれども同じ熱帶の西アフリカに更に兇惡な黄熱病が猖獗を極める時、博士野口英世は敢然としてこれが征服を志し、傷ましくも天職に殉じた。人道の父はかくして人類愛の前に、悲壯な犧

牲となつたのである。

偉人野口英世。その生地は福島縣耶麻郡翁島村といふ猪苗代湖畔の一寒村である。

商賈　あきんど。商賈人。

(一)江戸時代の富豪。近江の人。百貨店白木屋の祖。

會心の笑　心から滿足した笑。

(二)江戸時代の儒者。名は希賢、字は善藏、執齋はその號。京都の人。寛保四年(一七四四)歿、年七十六。

(三)今の京都市上京區官幣中社北野神社。

老鋪　代々續いて繁昌してゐる商店。しにせ。

家運を挽回する　家の衰へてゐるのを再興する。

自修文

大村彦太郎と三輪執齋

「東に赴き商賈たらば開運疑なし。」——彦太郎はこのおみくじを得て、會心の笑をもらした。

「東に赴き儒、醫たらば大々吉。」——善藏もかうしたおみくじを引いて、「しめたつ。」と叫んだ。

此所は京都北野の天滿宮。二人の青年は大村彦太郎と澤村善藏とである。大村家は京でも知られた老鋪だが、その頃は商賣上の手違からひどく窮乏してゐたので、彦太郎は豫て家運を挽回

しようと決心してゐた。善藏は町醫者澤村自三の子で、早く父母に死別れて、母方の親類大村家に引取られてゐたが、青雲の志抑へ難く、相謀つて將來の方針を決めようと、神慮を伺ふべく北野天神に通夜し、かうしておみくじを引いたのである。時に彦太郎は二十歳、善藏は十八歳であつた。

「やらう。」

「勿論ぢや。たとひ身を粉にしても……。」

朗かな笑と共に、二人は固く手を握り合つて、志望の達成を誓つた。をりからの朝日を受けて紅潮を呈した二人の頰には、鐵よりも堅い決心が見られた。

鐘一つ賣れぬ日もない大江戸の繁昌。その眞直中の日本橋には、往來の群集、車馬が織るやうに行違つてゐる。貞享三年三月三

青雲の志　立身出世の志。

通夜する　神社や寺に籠つて終夜祈願する。

紅潮を呈す　顏色が紅くなる。

(一)「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春」(其角)

(二)第百十二代靈元天皇の御代。(一六五四—一七四六年)

日、この橋上に二人の旅姿の青年が立つてゐた。大村彦太郎に澤村善藏である。聞きしに優るこの繁昌を目のあたり見て、二人の心は愈躍つた。

「とう〳〵お江戸に來たなあ。」

「お互にこれからは出世の競爭だ。」

「さうとも。身より頼りのない我々だから、精限り根限りが身上だ。獨立獨行――お互にやらう。」

「さうだ。獨立獨行……うん、さうだ。二人は今日を限り、五年間互に見ず知らずの他人にならうではないか。目的も違ふ。進む路も違ふ。別れ〳〵になつて、出世の競爭をしようではないか。」

「面白い。張合が出てよからう。五年後の今日までは赤の他人だ。だが、五年後の今月今日この時刻には、どこに居らうとまた此所で逢ふ事にしよう。」

身上（しんだい）。資本。

赤の他人　全然緣故のない人。

「よからうぞ。きつと逢はう。」

「それまでは身體をな、大事に……。」

「お互に……。」

「さらば。」

「では。」

二人は互に志す方へ向つて、夜の群集に紛れ込んでしまつた。

彦太郎は商賣にかけては自信があつた。おみくじの通り商人として身を立てようと、桂庵を頼つて或商店の手代に住込んだ。家運の挽回と善藏との競爭心とで、彼は寢る目も寢ずに働いた。かうして少しの資本が出來ると、彼は日本橋通一丁目に小切の店を開いた。當時にあつては、まだかうした商法は珍しかつたので、新奇な商法と

大村彦太郎

桂庵　仕事の周旋をする所。

(一)今日本橋區通一丁目。

小切　反物のきれはし。

櫛比する　ぎつしり列んでゐる。

手代　商家で番頭と丁稚との間に使はれる召使。

中間　武家などの召使。

(一)江戸時代の儒者。剛齋と號した。備後福山の人。享保四年(一七一九年)歿、年七十。

夙夜　あけくれ。朝夕。

涙ぐましい努力とは、日ならずして附近に櫛比する老鋪にも劣らぬ程の客足を引く事が出來、店運は日に〳〵隆盛に赴いた。

滿五年目の三月三日は來た。店を早めに片附けた彦太郎は衣服を改め、一人の手代を連れて、日本橋上に立つたと、時刻違へず、羽織袴に見違へる程立派になつた善藏が、これも一人の中間を從へてやつて來た。一目見るなり、二人は「出世したな」と思つた。

「おう。」

「おう。」

絶えて久しい五年目の對面に、二人は暫し言ふべき言葉もなかつた。やがて互の無事を祝ひ、五箇年の苦心を語り合つた。

善藏はあれから醫者にならうと思つたが、これといふ名醫にも逢はず、空しく一年を過したので、方針を改めて儒者たらうと、佐藤直方の塾生となり、夙夜業を勵み、學問も大いに進んだので、

(一)群馬縣(上野國)前橋市の舊名。

(二)酒井忠舉。十五萬石を食んだ。

十人扶持　十人分の俸米。一人扶持は一日玄米で男は五合。

袂を分つ　別れる。

後には師の代講をも勤めるやうになり、今は師の推擧で厩橋の酒井侯から十人扶持を賜はり、また邸宅をも賜はるやうになつたのであつた。

「お互に五年前の今日を思ひますと、變りましたなあ」

三輪執齋

「さうです。だが、ほんたうの出世はお互にこれからです。どうでせう、赤の他人をもう三年續けようではありませんか」

「結構です。これくらゐではまだ〳〵大成したとは申されませぬ。もう一辛抱で御座る。三年後を期して、この刻再び此所で對面致しませう。それまでは彦太郎殿」

「善藏殿、三年後を樂しみにお別れ致しませう」

三年後の大成を誓つて、二人は再び袂を分つた。

推しも推されもせぬ云々　堂々たる立派な呉服商。

賓禮　客としてのもてなし。

知遇を得る　格別のもてなしを得る。

若黨　年若い家來。

相擁して泣く　抱合つて泣く。

(一)王陽明の唱へた學問。陽明は明代の哲學者。名は守仁。浙江省の人。世宗の嘉靖八年(西紀一五二九年)歿、年五十七。

泰斗　尊敬の的になる人。

儒林　儒者のなかま。

三年は經つた。

彦太郎はもう小切商ではなかつた。手代五十餘人も使ふ、推しも推されもせぬ堂々たる呉服商になつてゐた。善藏もまた當時の學界に名を馳せて、酒井侯から三十人扶持を賜はり、その邸内に賓禮を以て遇せられ、他の諸侯からもたゞならぬ知遇を得てゐた。――番頭二人に手代二人を連れた彦太郎と、若黨二人に中間二人を連れた善藏とは、日本橋上の夜に、舊を憶ひ今を思つて、相擁して泣いた。

江戸時代を通じて陽明學の泰斗として儒林に重きをなした三輪執齋は、卽ちこの澤村善藏であり、今日東京に於ける大百貨店の一に數へられる白木屋の創業の祖は、この大村彦太郎なのである。

(一)俳人。名は清。明治七年(一八七四年)松山市に生れた。

素足

一八　蟲の音

高濱虛子

闇の庭には唯蟲の聲が聞える。少し朽ちた竹縁に腰を掛けて、冷やかな沓脱石の上に素足をのせて、じつと闇の庭の面に向つてゐると、庭一面に蟲の聲がしてゐるやうに思はれる。

「あれは松蟲の聲だらうか。」

「あれはこほろぎの聲だらうか。」

「あれはいとゞの聲だらうか。」

「あれはきり〳〵すの聲だらうか。」

などと、一つ〳〵に蟲の音を聞分けようとするのは、ちやう

ど綾錦の絲を、これは赤、これは青、これは金、これは綠と選分けるやうなものである。成程一つ〳〵の聲を聞分けようとすれば、松蟲、こほろぎ、いとゞ、きり〴〵すと區別はつくけれども、それ等の蟲の音は、何れも一枚の綾錦に織成されたやうに、唯全體が凜々と響いて來るのである。闇の夜であるから、確かにはわからないが、彼所にあるのであらう一叢の草の根元から、また此所にあるのであらう一叢の草の根元から、それ等の蟲の音は涌立つやうに響いて來る。何千、何萬、何十萬といふ數を量る事の出來ない多くの蟲が、何れも互に負けまいと音を張上げるのであるから、可なり騷々しい。しかしながら、「闇の涼しさ」といふやうなものがあるのなら、それは必ずこの蟲の音から來るのであらう。否、秋も半ば過であるから、涼しさといふ感じは通り越して、うすら寒い感じである。「闇のうすら寒さ」といふやうなものがあるのなら、それはきつとこの蟲の音から起るのであらう。

ふと聞くと、後の床の間の壁の所に當つても蟲の音がする。天井の方に當つても蟲の聲がする。床の下に當つても同樣に蟲の聲が聞える。今まで庭ばかりと思つてゐたのは間違であつて、自分を取圍んで四方から蟲の聲が聞えるのである。よく〳〵聽くと、聲高い一つの蟲が天井の隅の方で鳴き始める。さうすると、それに負けまいとして、同じ高音が床の下から聞える。今まで庭に鳴いてゐた蟲の聲の中にも、一

張合ふ

際高いのが聞え始めて、天井や床の下の音に張合ふものゝやうに見える。

じつと闇を見詰めてゐると、それ等の蟲の音色が、闇の中に明らかに見えるやうな心持がする。蟲の音色が見えると言ふのは變なやうではあるが、「ちんちろりん」と鳴くその鳴聲は、いかにも透明な音色であつて、闇の中にその音色が明らかに見えるやうな心持がする。また「りん、〳〵」と鳴く蟲の音も、同じやうに透明な音色である。その音色は、明らかに「此所もとにゐるぞよ」といふ風に響く。「すいつちよ、〳〵」といふ蟲の音も、同じ透明な響である。その「すいつちゃ、〳〵」と鳴くのは、「此所ですよ」といふ風に明らかに響く。「がちや、〳〵、〳〵」と格段に強く騷がしく響くのは、蟲の中のあばれ者でもあるやうに、他の蟲の、かはいらしくもの哀れげであるのと違つて、どことなくのさばり出るやうな感じであるが、しかし、そのうちに、また一種の哀れさが見える。この大きくのさばり出る蟲の音は、外の蟲の音から比べると格段に高く、「此所に私が鳴いてゐます」といふ風に、明らかに看取される。さうしてそれ等の諸の音が、際立つて大きいのから、つぶ〳〵とした小さいのに至るまで、幾百千となく錯綜して響く。この音色のをさになり、綾になり、もつれ、ほどけ、卷返し、繰返しする樣が手に取るやうにはつきりと聞えて來る。それがちやうど、闇に目があれば、眼前に明らかに見えるやうな感じ

錯綜する
をさ(筬)
もつれ(縺)

を起させる。

沓脱石の上を足で探ると、鼻緒のとれかゝつた庭下駄がある。それをつゝかけて庭におり立つて見る。足音を立てゝ庭の路におりると、此方の叢の蟲は少し音を潜めるが、彼方の叢の蟲は平氣で鳴いてゐる。暫く其所に佇んでゐると、もう大丈夫だと心をゆるしたものゝやうに、すぐまた蟲の音は高まつて來る。また二三歩歩くと、そのあたりの叢は少し潜み音になつて、五六歩、七八歩と歩くに連れて、同じやうな事をまた此所でも繰返す。もう最前の叢の所の蟲は、平氣で高音を張上げて鳴いてゐる。今音を潜めた蟲も、私の足音が行過ぎると、すぐ高い音になつて鳴く。最前、縁に腰掛けてゐる時分にも、なほ床の間や、天井や、床下に鳴く蟲の音もあつて、恰も蟲の音の中にゐるやうに覺えたが、今此所に來て庭の眞中に立つて見ると、愈、蟲の音の直中にゐるやうな心持がする。

下弦の月

この時、どことなくほの白くなつて來た事に氣がつく。もうそろ〳〵と下弦の月の出る頃であるから、今月白が上つた頃であらうと思ふ。さう言へば、草花に置いてゐる露の玉が、少しづゝ光つて來るやうな氣持がする。今まで闇の中に唯黑く叢のある事を知つたばかりであつたが、それが萩の叢であり、紫苑の叢であり、薄の叢であり、桔梗の叢であり、をみなへしの叢である事が、漸くにしてわかりかける。萩の圓

たゆたふ

く枝垂れてゐる先が、地を摩つて暫く伸びて、ぴんとその先のはねあがつてゐる樣子などが、だん〳〵と明らかになつて來る。秋風が來てその叢に吹當ると、暫くはたゆたふやうにしてゐるが、やがて二つに割れて、その風をじつとこの萩に支へてゐて、その風の力が弱ると、さわ〳〵と音がして、再び元のやうに圓く枝垂れた形に戻る。こんな事もよく見えるやうになつて來る。やがて萩の花の紅い白いといふ事も、見分がつくやうになつて來る。紫苑の丈高い莖の先に、一輪づゝ花をつけてゐる樣子も明瞭になる。その紫苑の葉の、莖の根元から伸びてゐる樣が、夜目にも力强さうに見える。をみなへしの黃色く、もの哀れげに咲滿ちてゐる樣も見える。

桔梗の花はとり繕ふ術も知らぬものゝやうに、頑な人の如く規則正しくついてゐる。その有樣も手に取るやうに見える。

月はいつしか我等の目に入るあたりまで昇つて來た。下弦の月と言つても、その弓は可なり引きしぼつた形である。空には一點の雲もないので、今は月光は隈なく庭の面を照す。先に闇の中にこの庭を見詰めた時の感じとすつかり違つて、今はもう庭のたゝずまひが、殘らず目に入るやうになつた。

ふと氣がついて見ると、やはり蟲の音は盛に聞えてゐるのであるが、どうしたものか、かく目に庭の景色の明らかに

見えるやうになつてからは、その蟲の音は前程明らかに聞えないやうな氣持がする。萩の叢を吹く風は、その後たびたび同じやうな姿を繰返すのであるが、その萩の叢の風に搖られる樣が、明らかに見えれば見える程、蟲の鳴く音が朧氣になつて行くやうな氣持がする。くつわ蟲は相變らず聲高く「がちや、〳〵、〳〵」と鳴きたてゝゐるが、それでも明るい月の下では、哀れにか細い音に聞える。

私は再び竹緣に來て腰をおろして、庭の面を眺める。萩の叢や紫苑、桔梗、をみなへしなどの叢には一面に露がおりて、きら〳〵と光つてゐる樣が、手に取るやうに見える。その露の一つ〳〵に光る樣は、ちやうど最前闇の中に蟲の音を聞

くつわ(轡)

いた時、その音が一つ〳〵に透明な音色に見えたやうに、その露の玉は一々透明に搖動く。蟲の音の方は今は朧氣になつて、最前のやうな透明な光を見せないが、それとなり代つて、今は露の玉が一つ〳〵に光つて、眼前の葉先に搖いでゐる。かの床の間や、天井や、床下に聞えてゐた蟲の音も、今はどうやら止んでしまつたやうだ。月は少し破れた軒端から疊の上に光を落し、床の下をも明るく照してゐる。

私は秋草に置く露の玉の風に搖ぐたびに、大きな塊になつて、それが一つ〳〵に光つてゐる光景に目を見張つて、再び蟲の音に耳を傾けた。

一九　大海原の歌

坪内逍遙[一]

[一]英文學者、劇作家、文學博士。名は雄藏。岐阜縣の人。昭和十年（二五九年）歿、年七十七。

大いなるかな大海原。
朝に夕べにたう〳〵と、
動きとゞろき夜もすがら、
大浪小浪寄せかへる。
いづこに打たぬ浪を見ん。
いつ浪の音を聞かざらん。

大いなるかな大海原。
世界の山々こと〴〵く、
崩すとも海は埋るまじ。
世界の川々絶間なく、

注げども海は長へに、
不增不減の瑠璃の色。

長閑けき樣は海にあり。
風なぎ果てし春の沖に、
おぼろにうつる月見れば、
荒ぶる心もなぎぬべし。
松島かげの朝ぼらけ、
蓬萊山[一]もよそならず。

すさまじさはた海にあり。
春秋二季のおほあれに、
はやて起つて浪立てば、

不增不減の瑠璃の色。

[一]支那の傳說に東海中にあつて仙人の住むといふ神山。

甲鐵艦も木の葉と漂ひ、
おほ高じほの逆卷けば、
村々流れて跡もなし。

山は崩れ、川は涸れ、
國興亡し、人かはり、
陸には古今の別あれど、
海原のみは開闢の
神代の姿そのまゝに、
動きとゞろき寄せかへる。

百代の師
萬世の範
匕首肺肝を穿つ
代謝する

二〇　今

市島春城[一]

私はいくら字書を繙いて見ても、「今」といふ字より、より以上の力強い字を發見する事が出來ない。古來の賢哲、能く百代の師たり、萬世の範たる金言を遺したと言つても、「今」といふ語以上に力強い語を案出した者はない。正にこれ匕首肺肝を穿つの語である。人生唯「今」あるのみである。昨日は去れる「今」であり、明日は來らんとする「今」である。回顧は過去つた事に對するものであり、豫想は假設であつて、我等にあるものは、唯「今」のみである。日月は移り、動植物は代謝し、天地は須臾も息まない。そして刻一刻推移し行く「今」こそ宇宙の本體である。

(一)實業家、文學者。名は謙吉。萬延元年(一八六〇年)越後國(新潟縣)に生れた。

既往

これを我等の日常に見るも、「今」といふ瞬間程大切な時はない。事の成るのも敗れるのも「今」にある。この瞬間こそ髓の底までも振ひ起す力がある。「今」の外に既往と未來とがあるかに見えるが、畢竟、既往は「今」の葬られた殘骸であり、未來は「今」のまだ生れない陰影であつて、其所には何物もない。既に葬られた既往を語るのは、死兒の年を數へるやうなものであり、まだ生れない來年を語れば、鬼が笑ふと言はれてゐる。既往は追ふべくもなく、未來は期し難い。唯根强く迫り來る力は「今」といふ一瞬にあるのだ。既往に善なるもの偉なるものがあつたとしても、それはその當時の「今」に於て成つたものだ。更に再び善なるもの偉なるものを求めようと欲したならば、「今」これを爲す外はない。

天地不息の大道

今日しなくても明日あると言ふが如きは、天地不息の大道に背くものである。これを未來に期すと言ふ如きは、永へにこれを失ふと言ふに同じい。特に未來といふ別境地の存するのではない。「今」――現在の推移……これやがて未來である。未來に期すと言ふのは、畢竟、薄志弱行者の遁辭に過ぎぬ。未來などいふ空虛を假定するのは愚である。何ぞ直ちに起つて今これを爲さゞる。期し難い假定に遁れるのは、その優柔怯懦を自白するものでなくて何であらう。

薄志弱行者の遁辭

優柔怯懦

故に私は全力を「今」の一字に注ぎ、斷として「今」の一瞬を守る。一人の生涯、一國の運命、唯「今」に全力を傾注するに於て、始

直截　惰容

めて大成が期し得られるのである。「今」を外にして競爭場裏に立つ事は難い。鬪は「今」である。勝敗は「今」の一瞬にある。「時は今」と叫ぶ時、其所に果斷の決心があり、剛健の意氣があり、直截の邁進があり、奮鬪の努力があり、その間一毫の惰容を赦さぬ。かくして全力の發動となり、渾身の熱血となり、精神一到して大事が成るのである。私は一意「今」を禮讚する。

昔、黑田如水は豐太閤の偉業を思つて或時問うた、「殿下の成功には必ず祕訣があるでありませう。願はくはそれを承りたい」と。豐公は笑つて、「別に祕訣はない。唯過去を追はず、未來を慮らず、今日一日の事業を一心不亂に爲したに過ぎぬ」と答へたとあるが、豐公も「今」の禮讚者である事が知れる。英

別懇　(一)父宗淳に茶道を受けてこれを善くした。元叔と號する。元伯また元(二)萬治元年(一六五八)寂、年八十一。

(二)今京都市上京區。臨濟宗大德寺派の本山。

(三)大德寺の住僧。近江の人。書畫を善くした。寛文元年(一六六一)寂、年七十四。

揮毫

雄豪傑の事業も、「今」の成功の積まれたものである。私は「今」といふに因んで、更に茶人千宗旦(一)の一遺事を語らう。

宗旦が新たに茶室を建てたをり、豫て別懇の大德寺(二)の名僧清巖和尚(三)が、多分普請も落成に及んだであらうと尋ねて來た。宗旦は悅んで迎へ、「普請は漸く成つた。どうか庵號を考へて下さい。」と言つた。清巖は「いかさま尤もの事だ。しかし、何ぞ好みはないか。」と問うた。宗旦は暫く考へ、「古語に『懈怠比丘期明日。』とあるが、いかにも面白く思ふ。」と言ふと、清巖はうちうなづき、「成程面白い。人間の生涯は明日も知れぬ事だから、庵號を『今日庵』とされてはどうか。それでよければ額字は揮

倉卒

毫しょう」と言ふと、宗旦はひどく悅んだ。さて種々の物語に時も移つたので、清巖が暇乞して去らうとすると、宗旦は引留め、「今此所で額字の御揮毫を」と需めた。すると和尙「いや、それは餘りに倉卒。追つて認めて進じ申さう」と言ふのを、宗旦「さやうにては今日庵の意にかなはず。只今此所ですぐお書き下されてこそ今日庵だ」と言ふと、清巖も尤も至極と筆紙を求めたが、卽座に唐紙や筆を辨じかねた。紙は僅かに障子の張殘りを見出したけれど、筆のないのに當惑した。をりから傍にゐた妻女が眉掃を取出し、「こんな物で間に合ひますなら」と言ふに任せ、清巖は立所に「今日庵」の三字を書いた。これが千家に名高い額面である。清巖が揮毫を果して歸院すると、程なく宗旦から使があつて、「茶を進ぜたう御座いますから、只今すぐお出を願ふ」とあつた。清巖は不審を抱き、つい今まで話してゐて、そのをり何のさたもなかつたのに、妙な事だと思ひながら、直ちに出掛けると、先刻書いた額面は、針で留めて壁に掲げてあつて、宗旦は茶室開の茶を點てた。その日を越さず卽日茶をふるまつたところに、宗旦の趣向があるので、今日庵といふ以上は、かくなければならぬと、清巖も感に入つたとの事である。——春城筆語——

感に入る

今庵

(一)江戸時代の儒者。白圭と號する。江戸の人。篠山侯松平氏に仕へた。寶暦三年(一七五三)、四十二歳。

(二)今京都市下京區。

二一　窓のすさみ

松崎堯臣(一)

○

京なる富家、七月十四日債を乞ひに人を遣りけり。使の者集め得て歸るとて、(二)四條あたりにて落しけり。初昏過ぐる頃なれば、連れたりつる一奴と共に、月影をあてに此所彼所と尋ぬれども見えざりければ、假橋のあたりまで歸りけるに、乞食の一人立向ひ、

「そこには物を尋ねらるゝ由なるが、若し金子にては候はずや。その員數を承らば、先に拾ひ置きしを返し申さんと、心待ちに致し居り候」。

あからさまに

と言ふ。使の者驚き怪しみながら、あからさまに言ひければ、包める金を取出し、

「なほ改めて取り給へ」。

とて渡しつ。使の者手をすりて、

「かしこき志にて再び求め得て、我が曇なき心の喜限りなしさるにても、わぬし乞ひ得ざる時は食を絶つ身をもて、かゝる寶を人知れず拾ひ得しは天の賜なり。夜の事にてはあり、など自分の物として急を補はず、かくまで心を盡して、行方も知らぬ主を待ちて返しつる。そは潔き心ながら、身の爲には殘り多くこそ思はるれ」。

わぬし

と言ひければ、乞食うち笑ひ、

「不幸にしてかゝる身にこそあれ、乞ひ得ずして死なんは天命なり。一旦の飢を遁れんとて、天を終る非をなすべしや」。

と言ひけるに、使の者面を赤らめ、

「さても恥づかしき事なりけり。さてこの金を少しなりとも分ち贈りて、恩に報ゆべきなれども、債を乞ふ使なれば、私なり難し。我歸りてこの由を申さば、主人はかゝる事聞きて過さぬ人なり、程なく來て心の及ぶ程謝し申すべし。必ず外に行かで此所に持ちてたべ。たゞ飢ゑてこそあるらめ」。

とて、あたりの餅賣れる店より一皿買求め得させて、

「これを食して必ず此所に待たれよ」。

とて、急ぎ家に歸り、しか〳〵の由を語りけり。主人いたく感じて、

「そは常ざまならぬ人なり。乞食にて終らしめんこと口惜し。我これを免れさせん。先づ呼びて直に見ん」。

とて、急ぎ駕籠をしつらはせ、迎の人をやりけるに、飢ゑたる者の急に多く食しける故にや、其所にそのまゝ死してありけり。主人いたく惜しみつゝ、棺に納めて厚く葬ひけるとぞ。

○

或君宴を設けて客を招かれし時、小童客の前に菓子を持出づるとて、袖の間より柿一つぼかり落しぬ。赤面して進退

きはまりしに、君叱りて曰く、

「無賴の小兒、主君の與へし物はそのまゝに食ふべきものなり。早々に持去るべし。彼母のある故に、送り與へんとて貯へたり。さりながら無禮にこそ。」

とありしかば、滿座の客、「陸績の橘にこそ」と賞し合へり。

宴終りて兒を呼びて、

「初より知らざりしかとも、小童ながら面ぶせなるを見過し難く、かつは余が恥をも紛らさんとて、前の如く言ひしなり。重ねて、はかやうのたはぶれ愼むべし。」

とぞありける。

年經てこの君卒せられし時、かの小童なりし者も殉死せしとかや。

(一)支那の故事。吳志といふ書に「陸績、字ハ公紀、廣ノ子、年六歲、袁術ニ九江ニ見ユ、術、橘ヲ出ス、績、三枚ヲ懷ニキ拜シテ去ルトキ、持テ地ニ墮ス、術曰ク、陸郎何ゾ懷ニスリテ乃チ賓客トナリヲ、橘ヲ懷ニ績跪キテ答ヘテ曰ク、歸リテ遺ラント母ニ欲スト、術之ヲ奇トセリ」とある。

二二　桃山御陵

田山花袋

—窓のすさみ—

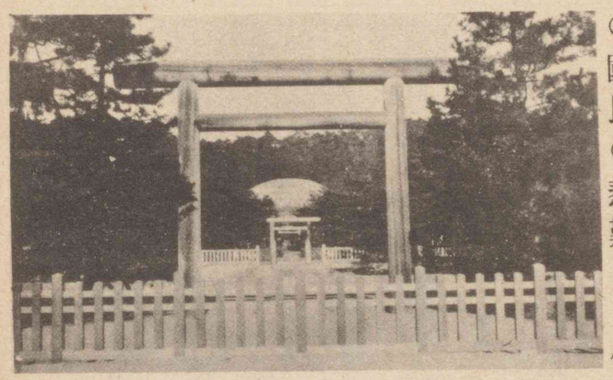
桃山の二つの御陵では、色々な事が考へられる。今を以て古へを考へるといふ事があるが、實際私は、その前に額づくと、私たちの見て來た事ばかりではなしに、遠い昔の事までも、取集めて考へられずにはゐられないのであつた。私は其所で、天武天皇の陵へ後から持統天皇の陵を合せた事なども想ひ起した。また柏原の陵に御子の嵯峨天皇が涙を流して祈念された事を想ひ起した。それは、その大小はあつたにしても、昔はどの天皇でも、皆私たちが見て來たと同じやう

(一)京都市伏見區桃山町。
(二)伏見桃山陵と桃山驛から東北約一五〇〇メートル。明治天皇と昭憲皇太后との陵。
(三)第四十代。奈良縣高市郡檜隈大内陵。
(四)第四十一代。天武天皇の皇后。
(五)第五十代。桓武天皇の陵。桃山陵の北西。
(六)第五十二代。

にして、一つ〳〵その陵を築かれたばかりでなく、その當時の國民の悲歎をも俱にその中に混ぜて、埋葬されたのであつた。であるのに、中世以後はどうなつたであらうか。さうした事は絶えてしまつて、あの京都の東山の南の外れに近い泉涌寺(一)の中に、微にその存在を示されるだけになつたではないか。そして元からあつた一つ一つの陵などでも、亡びた國の帝王の陵でゞもあるかのやうに、全く顧られずに何世紀かを過したではないか。中には、どれがどれだ

(一)京都市東山區。四條天皇をはじめ數代の天皇の陵のある所。

世紀



桃山御陵

か、わからなくなつたやうなものもあつたではないか。つまり、それだけ國が衰へ世が沈んでゐたので、さういふ事をして置いてはいけないといふ事は、足利時代の將軍も、信長も、秀吉も、家康も、またその後繼者も、みんな知らない事はなかつたのであらうが、或は經營に忙しく、或は戰亂に追はれ、或は自己の驕奢に心もしひて、其所まで手を出す餘裕はなかつたのであつた。しかし、長い間の歴史の波は、漸く大きな物を打出して來た。私たちは次第に闇い〳〵歴史から、眼も煌くやうな明るい方へと出て行つた。それを思ふと、維新の時に、山陵の荒廢に著目して、それによつて勤皇の志を燃立たせようとした者のあつた事なども、徒爾には見逃してしま

驕奢

徒爾

卑屈

硬水（サケカタ　ヨミ　ヒ　ミズ）
軟水（ヤワ　ミズ）

脱却する

遭逢する

ふ事の出來ない事實であつた。

桃山の御陵に參拜する者で、誰か我が大倭の昔を思ひ出さぬ者があらう。千年にして始めてその昔に還されたその明治天皇の偉きな御功業を。自ら戸を閉ぢるやうな卑屈な政治の狀態から脱して、飽くまで外へ〳〵と伸びて行かうとしたその立派な對外の硬政策を。何等の好運ぞ。私たちは大倭時代よりも、更に一層光輝あり、一層力ある世を、ありありと眼の前に見る事が出來たのである。佛教などの惡い方面にとらはれて、夥しく感傷的になつた社會の空氣から全く脱却して、更に自由に、更に大きく呼吸づく事が出來る世に遭逢したのである。私は桃山御陵の前に立つ毎に、いつも雄大な「時」の羽風が耳邊を掠めて通つて行くのを、聞得るやうな心地がする。

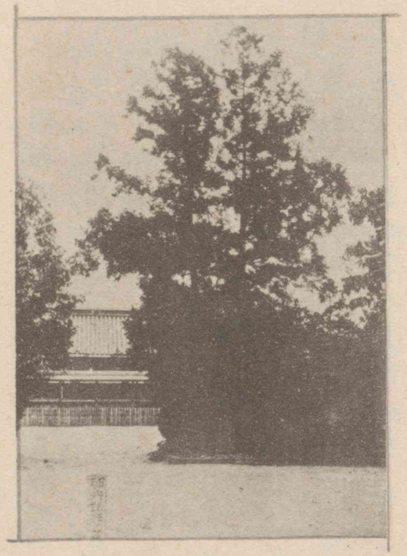
——花袋行脚——

(一)歴史家、文學博士。前臺北帝國大學總長。明治三年（二五三〇年）大阪府に生れた。
(二)福岡縣（豐前國）北端の開港場門司市。
税關　輸入品に税を課する事を司どる役所。
好意　深切なこころ。
(三)山口縣（長門國）豐浦郡長府町。門司市の對岸下關市より東北約八キロメートル。

自修文

ゆかしの杉

幣原坦



門司で税關長の好意によつて、我が船の碇泊中に、長府の乃木神社に參拜する。神社の隣は乃木將軍の舊宅で、邸内は二百餘坪あるが、家の建坪は僅かに八坪餘に過ぎない。明治元年將軍が父十郎翁の指圖に從つて、北風を防ぐ爲に植ゑられた杉の苗は、もはや天を蔽ふばかりに生長し、將軍が歸郷の時汲んで

昔をしのばれたといふ井戸の水は、東北隅の老梅の下に今なほ涌いてゐる。あゝ、ゆかしの杉よ。懷かしの梅よ。

この杉の影は今は唯二百餘坪の風を防ぐのみでない。梅の香はまた井戸の邊に薫るばかりでない。その影は世界に廣がり、その香は天下に滿ちるとも言ふべきである。ずつと前に自分がアフリカの内地を旅行した時、(一)スダンの首府(二)ハルツームに於てすら、乃木將軍崇拜のイギリス士官に會つた事がある。

天涯地角、所もあらうに、こんなアフリカの内地で將軍崇拜者に會はうとは。この士官は(三)レッゲート大尉と言つて、仙臺の師團に三年間見學をした人であつた。

士官は自分に向つて言つた、

「私は日頃乃木將軍を敬慕してゐますので、何とかして生涯の間に、一度將軍の爲に犬馬の勞を執りたいと思つてゐます。幸

(一)アングロ・エジプト・スダン。イギリスの勢力範圍。
(二)ナイル河の上流。イギリスから派遣する總督の居る所。
天涯地角　極めて遠い地。
見學　實地に見て學ぶこと。
犬馬の勞　君の命にしたがつて力をつくすことの謙稱。

ひ英國皇帝(一)ジョージ五世陛下の戴冠式には、將軍もロンドンに來られるといふ。その頃には、私も此所の守備の任務を了へて、(二)ダブリン聯隊に歸營する事になつてゐます。萬一あなたがその頃英國にをられたならば、どうぞこの希望を將軍に通じて、何か御役に立つ事に私を使つて下さるやう、取次いでは下さいませぬか。」

自分は思ひがけない人に、思ひがけない依頼を受けて、初は少し驚いてゐたが、敬慕の情が面に溢れてゐるやうであつたので、取敢へずこれを承諾した。そこで士官は大いに喜んで、自分がハルツームを出發する時、自分に固い握手を與へた。

さてこの年の六月、英皇の戴冠式が行はれた。自分もその頃はロンドンに滯在してゐたので、六月十日の朝ハイド・パーク・ホテルに將軍を訪うた。これ一つには、日本使節の一行が無事にロン

(一)西紀一八六五年―一九三六年。
戴冠式　ヨーロッパ諸國の君主が即位後に行ふ重要な儀式。
(二)アイルランドの首都。
使節　政府の命を奉じて他國へ使する者。

前約を履む　前の約束を實行する。
恰も好し　丁度都合よく。
(一)豫備役陸軍歩兵大佐樋渡盛廣。鹿兒島縣の人。
(二)第七高等學校造士館。
萬端いろ〳〵。萬事。

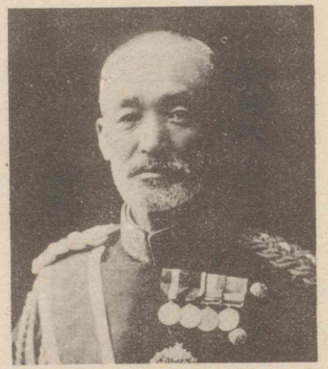
ドンに到著されたのを賀する爲であり、また一つには、ハルツームに於ける前約を履む爲であつた。恰も好し、將軍の接待係である在英國日本大使館附武官樋渡(一)少佐は、自分が高等(二)學校教授時代にその學校の生徒であつたやうな關係から、この人を通じて一應、レッゲート大尉の意を傳へてもらふ事にした。

然るに將軍等の一行に對する萬端の接待は、イギリスの皇室に於て、痒い所へ手の屆くやうに行はれるのであるから、少しも個人の世話を要する事はない。そこで手紙をダブリン聯隊へ出して、餘りに失望しないやうに、レッゲート大尉へ申し送つた。事は成立しなかつたけれども、乃木將軍の、英國士官の中にもこのやうな崇拜者を有してをられた事が、今更の如く思ひ出されるのである。

自分が將軍にハイド・パーク・ホテルで會つた時には、將軍はモ

溫厚篤實　ものやはらかで深切なこと。
旅順の猛將　乃木將軍は明治三十七八年（一二五六四五年）の日露戰役の際、旅順攻圍軍の司令官として勇名を馳せた。
(一)ヨーロッパの東南部。
(二)ユーゴースラビヤの首府。
識別する　見分ける。

ーニング・コートを著て、外出しようとせられる時であつた。それにも拘らず早速その部屋に通して、快く談話された。その溫厚篤實な事、少しも旅順の猛將たる面影を認める事が出來なかつた。



春風のそよ吹く如き感じは、唯自分ばかりでなく、誰でも同じく與へられたものと見える。自分がバルカン半島を旅行してベルグラード(一)に著いた時、グランド・ホテルの番頭が自分を迎へてかう言つた、

「あなたは日本人でせう。私はもはや一見して日本人を識別するやうになりました。なぜならば、數日前乃木將軍もこのホテルに宿泊されたからです。東洋の英雄はどんな烈しい人かと、驚異の眼で部屋に案内しましたが、私の想像は裏切られまし

奇緣　不思議な緣。
餘德　先の人の遺しておいた恩德。
勃發　にはかにおこる。
土著の人　その土地にすみついてゐる人。
款待　こんせつなもてなし。

た。將軍が溫厚篤實な君子人であつたのは、全く意外でありました。この經驗は、私を將軍敬慕者の一人たらしめました。今日また此所に日本の方を案內するのは、奇緣のやうに思はれます」。

自分は圖らずも將軍の餘德を以て、世界大戰の勃發した災源地に於てさへ、土著の人の款待に接する事を得た。

しかし、多くの外國人の中には、將軍の人となりを諒解してゐる者が多いとは言はれなかつた。否、乃木といふ讀み方すらもよく心得ない人々もあつた。但し將軍に對する人氣は、たいしたものであつた。英皇戴冠式の行列の中に、東鄕大將と同乘する乃木大將の自動車が現れて來ると、「ノガイ、バンザイ」と連呼する公衆もあつた。

自分は或イギリスの老婦人に將軍の事を說明して、愛子のすべてを戰場に失はれても、「御國の御用に立つてくれた」と喜ばれたと言ふと、その老婦人はこれをうち消して、「そんな事は想像する事が出來ない」と言つた。馬小屋だけは立派に建てられた事を述べると、老婦人は始めて感服して、「成程、動物愛護の精神にかなつてゐる」などと言つた。

直覺的に　見ただけで聞いただけですぐ。
共鳴　他人と同樣に感ずること。
葬式の日　大正元年九月十八日。
(一)東京市赤坂區。

かやうに、國民性の異なつた國に行くと、乃木將軍の人格を知識階級の人に說明する事すら容易でないが、そこになると、我々同胞の間では、どんな無學の人でも、直覺的に共鳴を感ずる。

將軍の葬式の日、自分の家族は電車に乘つて、(一)青山の葬場へ赴いた。車中の人々も、「あなたはどこへ」、「私は青山へ」と、多くは青山へ行くのであつた。身なりの卑しげな一人の老婆が、小倉の袴を著けた孫の手を引きながら、「あなたも青山へか」と人に問はれて、「はい、さやう。私の一人子息は旅順で戰死した際に、乃木大將の

心事　こゝろね。

金よりも更に云々　金以外に人格の必要なことを言つたのである。

(一)作者が歐米を漫遊した時の感想を書いたもの。

(二)儒者。號は梧樓。陸中の人。幕末の頃國醫を以て盛岡藩に仕へ、尊皇論を唱へて活躍した。明治十二年(一八七九)歿、年五十二。

下で御役を務めて居りました。その御恩を思ひますれば、何として忘れる事が出來ませう。形見のこの孫をせめて亡き子息の代理として、御葬式に連れて行きます」。

一人子息が殺された時の大將を恨む事か、全くその反對に、忠實な感謝の誠意を捧げつゝある。このやうな純潔な崇拜者を有する乃木將軍の心事。あゝ、誰か泣かされない者があらうか。

ナポレオンは必要な物を問はれた時、「一に金、二に金、三にも金」と言つたとか。これまでの日本には、金よりも更に必要な物があつたのである。

―世界の變遷を見る―

二三　繪畫の感化

或物事にかんじてその事をうつすこと

那珂通高

下總國の古河驛に、その氏は忘れしが、茂足といふ歌人あ

(一)共に滋賀縣甲賀郡。東海道五十三次の一。

(二)藤原藤房。吉野朝の忠臣。

念ず

うちつけに

十二

りき。その人、二十年許の昔、陸奥に來りて物語せし事ありしを、今思ひ出でたれば、書綴りて人々に見せ參らせん。

茂足少き時東海道より京へ上る。近江の石部と水口との間に、萬里小路中納言藤房卿の古跡と彫れる碑あるを見たりしかば、その跡のゆかしさに尋ね入りて見るに、觀音寺といふ寺ありて、其所に卿の念じ給ひしといふ觀音を安置せり。その御佛の御前に、我より先に旅商人と思しき五十餘歳の男入り來りて、何事を歎くにか、さめ〴〵と泣きゐたり。うちつけにその故を問ふべくもあらねば、立去りてもとの驛路に出でぬ。頃しも如月の初なりければ、日影暖かなる所を見出でゝ憩ひゐたるに、かの男も出で來ぬ。茂足は「日影も暖

やんごとなし

懺悔

(一)今大阪市東區。

かなり、ちと休み給はずや」と言ふに、かの男會釋して、同じ所に腰うち掛けたり。しばし四方山の物語して、さて後に、「先には觀音寺にて見掛け參らせしが、かの卿に深き御所緣などおはしますにや」と問ふにいと恥ぢらひたる氣色にて、「さては世に似ぬ歎せしをや見給ひけん。賤しき身のいかでやんごとなき御方に所緣などいふ事の候べき。但し、今日しもふと思ひ出でし事ありて、涙せきあへざりけるを、恥づかしくも怪しまれ候ひけん。懺悔には罪も滅ぶと承れば、若き時の罪滅しに、遂すがら語り聞えん」とて、諸共に立出でぬ。

この男は津の國大阪の人にて、稚かりし時に父母を喪ひ、高麗橋(一)あたりの商人の家に奉公してありけるが、その家の

刀自
いとほし

(一)千葉縣山武郡。

お事

具す

(一)埼玉縣北足立郡。

子は遊蕩に耽りて、家繼がすべくもあらぬ樣なりしかば、父は怒りて勘當しけれども、母刀自は一人の男子故、流石にいとほしがりき。上總の東金(一)に出店あれば、竊かに其所守る人に賴みてんと思ひ寄りしかど、遙々の旅路を一人遣らんも心許なくて、この男召出でゝ、「お事は御兩親共に世にまさねば、何所に住むとも心安からん。後には必ず家分けて得さすべし、暫時が程我が子に具して上總の方に行きてよ」とて、金二十兩程預けられたり。さてその子と共に大阪を出でたれども、若き人の習にて、勘當受けし身のなほ過を悔いもせず、夜毎に酒を廢めざれば、中山道の蕨(一)驛に來りし頃には、その金も殘りすくなになりにけり。

明日江戸より船出せば、東金に渡らん事も難からじなど聞くにつけて、行末の事を思ひ續くるに、かゝるたのもしげなき人に具して出店に行きたらんには、たとひ母刀自の書ありとも、同じむれのえせ者とや思はれん。よしさは思はれずとも、この人の心なほらぬ程は、大阪にも歸らるまじ。とにもかくにも、よしなき人に伴なひて遙かに來りけりと、悔しさ限りなかりしが、また思ふやう、身を立てよすが求めんには、江戸にまさる所やはある。此所まで來しこそ幸ひなれ、今宵のうちにこの人を捨てゝ歸らばやと思ひ寄りしかど、暫時の程も貯なくてはいかゞはせん。かくと知りなば、預りし金あるうちに、とにもかくにもすべかりしを、後れにけりと

えせ者
よしなき人
よすか

また更に悔しがりけるが、この人の脇差は、その父の物好より、百兩餘のつひえもて作りたる物なる事を思ひ出でゝ、よしよし、こを盗みて賣りしろなさんには、十日、二十日の日を送るに難き事はよもあらじと、心一つに謀りすましして、さらぬ樣にもてなしつゝ、今宵限りの旅寢なればなど言ひこしらへて、酒勸めて寢させぬ。

夜更けて後にそと起出で、枕邊に忍び寄りて窺へば、立てまはしたる屏風の内に、鼾の聲のみ聞えたり。時こそよけれと、徐かに屏風に手を懸けて引きあくるに、内より行燈の火影のさとさし出でゝ、後のふすま障子に映りたるを、人や來ると驚きて顧れば、今まで見も入れざりしそのふすまに、藤

賣りしろなす
言ひこしらふ
ふすま(襖)

(一)京都府（山城國）和樂郡、木津川の南岸。元弘元年（一三三一年）後醍醐天皇北條氏誅滅の爲、此所に行幸せられた。

房卿の笠置より後醍醐天皇の御供して大和の方へ落ち給ふ時、松蔭に袖敷きて、その上に帝を寢させ奉りし形をなん描きたりける。この男これを見て、あなあさましやんごとなき御方だに、君の御爲にはかゝる習はぬ憂き目をも見給ふものを、いかなれば我は主の物盗まんとまで思ひなりにけんと、悔しくも口惜しく覺えて、寢ねたる人の枕邊に額づき、繰返してその過をうちわびたりき。

かくて東金に到りて後も、憂き事あればこの夜の事を思ひ出でゝ、六年、七年過ぎたりしに、その人の心改り、家に歸りて父の跡を繼ぎしかば、我も約束の如く家分けて與へられたり。それより次第に仕合よくて、今は家業も子に任せて、あ

後めたし

涙はふり落つ

まさなき心

かぬ事なき身にはなりにたれど、さてのみ居らんも後めたさに、をり〳〵は此所らあたりまで物あきなひに參るなり。されば、いつとてもこの寺には詣でぬれど、今日しもふと思ひ出でければ、若しそのをりしもこの卿の御姿を見參らせずば、いかでかく事なくて世にはあり經べきと、忝さに涙はふり落ちて、君にも怪しまれ候ひぬ。我は賤しき生れながら、若き時より軍物語の書讀む事を好みければ、その時しもこの事を思ひ出でゝ、まさなき心を改めぬ。よりて子供等にも物讀む事は常に嚴しくおきて侍りと語りぬとぞ。茂足はその頃四十歳許の人なりき。

——洋々社談——

(一)江戸時代の儒者。大和國郡山藩の重臣。名は里恭。寶暦八年(一七五八年)歿、年四十三。

(二)今東京市下谷區。

身持律儀　戒行を保つ

什物

住持

二四　師の恩

柳澤淇園(一)

江戸下谷(二)高岸寺といふに、いつの頃にか弟子の僧二人ありけるが、一人は身持律儀にして、常々寺の爲ともなるべき事のみに心を盡せど、一人の僧は戒行をも保たで大酒を好み、いさかひなどして、萬づ私多かりしが、或時什物を取出して賣るを、一人の僧見て諫を加へけれども、聽入れざりければ、この由を住持に告げ、「かの僧追出し給はずば、寺の爲にもなるべからず」と言ふに、住持は「ひとまづ諭し見るべし」とて、嚴しく戒めたるまゝにて捨置きぬ。また或時佛具を取出して賣りたるを聞きて、一人の僧また住持が許に行きて、「惡僧

えこ(依怙)

このたびは佛具を盜み出し賣りたり。我等諫めたりとて更に用ふるところもなく、住持も捨置き給へば、是非に及ばず。我は行く〳〵禍の寺に及びて、身にもかゝらん事を恐れ思へり。若し彼を追出し給はずば、我に暇を賜はるべし」と言ふに、住持は涙を浮べ、「さあらば、願のまゝにその方に暇をつかはすべし。惡僧は今暫し我が傍に置きて、追々諭すべし」と言ふに、この僧大いに住持を怨み、「我等暇を乞はゞ、惡僧を追出し給はんと思ふものから、それを却りて罪なき我等に暇賜はること、近頃えこの心にあらずや」と言へば、住持答へて、「さにあらず。御身は今我が寺を出でたりとも、何所へ行きてもはや僧一人の勤はなる者なり。惡僧は今我が傍を離れなば、

徳すたる

忽ち捕はれて罪人とならんも測り難し。さすれば我が徳もすたれて、一人の弟子を失ふなり。故に今暫しは傍に置きて、彼が命をも延し、且は嚴しく教誡をもせば、善心に立返る事もあるべし。それを樂しみに我が傍を放つ事をせざるなり」。と言へば、この由を聞きて、惡僧も師の高恩に感じ、やがて善心に返りきとぞ。

—雲萍雜志—

帝國實業讀本　改制新版　卷三　終

附　錄

一 五十音圖
一 口語動詞活用表
一 口語助動詞活用表
一 口語形容詞活用表
一 口語形容動詞活用表
一 誤り易い口語動詞の語尾
一 誤り易い口語形容詞・形容動詞の語尾
一 誤り易い口語助動詞
一 通用字と正字・同字・異同別對照表
一 宛字

五十音圖

(ワ行) (ラ行) (ヤ行) (マ行) (ハ行) (ナ行) (タ行) (サ行) (カ行) (ア行)	(ワ行) (ラ行) (ヤ行) (マ行) (ハ行) (ナ行) (タ行) (サ行) (カ行) (ア行)	
ワ ラ ヤ マ ハ ナ タ サ カ ア	わ ら や ま は な た さ か あ	ア段
ヰ リ イ ミ ヒ ニ チ シ キ イ	ゐ り い み ひ に ち し き い	イ段
ウ ル ユ ム フ ヌ ツ ス ク ウ	う る ゆ む ふ ぬ つ す く う	ウ段
エ レ エ メ ヘ ネ テ セ ケ エ	ゑ れ え め へ ね て せ け え	エ段
ヲ ロ ヨ モ ホ ノ ト ソ コ オ	を ろ よ も ほ の と そ こ お	オ段
(バ行) (バ行) (ダ行) (ザ行) (ガ行)	(バ行) (バ行) (ダ行) (ザ行) (ガ行)	
バ バ ダ ザ ガ	ば ば だ ざ が	ア段
ビ ビ ヂ ジ ギ	び び ぢ じ ぎ	イ段
ブ ブ ヅ ズ グ	ぶ ぶ づ ず ぐ	ウ段
ベ ベ デ ゼ ゲ	べ べ で ぜ げ	エ段
ボ ボ ド ゾ ゴ	ぼ ぼ ど ぞ ご	オ段

口語動詞活用表

種類	行名	例語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	カ	聞く	キ／ク	か	き	く	く	け	け
	ガ	驟ぐ	サウ／グ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	サ	貸す	カ／ス	さ	し	す	す	せ	せ
	タ	害す	ガイ／ス	さ	ち	つ	つ	て	て
	ナ	打つ	ウ／ツ	た	に	ぬ	ぬ	ね	ね
	ハ	死ぬ	シ／ヌ	な	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	バ	問ふ	ト／フ	は	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	マ	飛ぶ	ト／ブ	ば	み	む	む	め	め
	ラ	踏む	ノ／ム	ま	り	る	る	れ	れ
		乘る	ノ／ル	ら	り	る	る	れ	れ
		有る	ア／ル	ら	り	る	る	れ	れ
		蹴る	ケ／ル	ら	り	る	る	れ	れ
上一段	カ	着る	キ／ル	き	き	きる	きる	きれ	きよ(ろ)
	ガ	過ぎる	アン／ジル	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ(ろ)
	ザ	生きる	ス／ジル	き	じ	じる	じる	じれ	じよ(ろ)
	タ	落ちる	ス／チル	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ(ろ)
	ダ	恥ぢる	ナ／ヂル	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ(ろ)
	ナ	煮る	ニ／ル	に	に	にる	にる	にれ	によ(ろ)
	ハ	干る	シ／ル	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ(ろ)
		强る	シン／ル	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ(ろ)

口語助動詞活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
受身	れる／られる	れ／られ	れ／られ	れる／られる	れる／られる	れれ／られれ	れよ／れろ／られよ／られろ
可能	れる／られる	れ／られ	れ／られ	れる／られる	れる／られる	れれ／られれ	
使役	せる／させる	せ／させ	せ／させ	せる／させる	せる／させる	せれ／させれ	せよ／せろ／させよ／させろ
過去及び完了	た	たら		た	た	たら	
打消	ない／ぬ		なく／ず	ない／ぬ(ん)	ない／ぬ(ん)	なけれ／ね	
推量	らしい／ようまい		らしく／ようまい	らしい／(う)(よう)(まい)	らしい／(う)(よう)(まい)		
希望	たい／たがる	たがら	たく／たがり	たい／たがる	たい／たがる	たけれ／たがれ	

口語動詞活用表

段	行名	例語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
下一段	ア	得る	え	え	える	える	えれ	えよ(ろ)
	カ	受ける	け	け	ける	ける	けれ	けよ(ろ)
	ガ	投げる	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ(ろ)
	サ	失せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ(ろ)
	ザ	交ぜる	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ(ろ)
	タ	捨てる	て	て	てる	てる	てれ	てよ(ろ)
	ダ	出る	で	で	でる	でる	でれ	でよ(ろ)
	ナ	連ねる	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ(ろ)
	ハ	敎へる	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ(ろ)
	バ	述べる	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ(ろ)
	マ	染める	め	め	める	める	めれ	めよ(ろ)
	ヤ	越える	え	え	える	える	えれ	えよ(ろ)
	ラ	流れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ(ろ)
	ワ	植ゑる	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ(ろ)
カ變		來る	こ	き	くる	くる	くれ	こい／しろ／せよ
サ變		爲る	せ／し	し	する	する	すれ	せよ／しろ

口語形容詞活用表

比況	定指	讓敬	種類	例語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	だ／です	れる／られる／ます	(ク活用)	高い	高(タカ)／い	く	く	い	い	けれ	
	だら／でせ	れ／られ／ませ	(シク活用)	新しい	新し(アタラ)／しい						
	だつ／でし	れ／られ／まし									
	だ／です	れる／られる／ます(ますろ)									
	(な)	れる／られる／ます(ますろ)									
	なら	れれ／られれ／ますれ									
		ませ(まし)									

口語形容動詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
第一種	高(タカ)し	から(ウ)	かつ(タ)				
	新(アタラ)し	から(ウ)	かつ(タ)				
第二種	靜か	だら(ウ)	だつ(タ)	だ	な	なら(バ)	
	丁寧	だら(ウ)	だつ(タ)	だ	な	なら(バ)	

誤り易い口語動詞の語尾

種類	正シイ假名	誤リ易イ假名
ハ行四段	言はない。言はう。 言ひたい。言ひます。言ひながら。 面白く言ふ。言ふ人。 言へば。面白く言へ。 言うて。言うた。	わ い、ゐ う え、ゑ ふ

（類語）扱ふ 洗ふ 爭ふ 誘ふ（いさな） 祝ふ 失ふ 歌ふ 疑ふ 占ふ 奪ふ 敬ふ 負ふ 追ふ 行ふ 思ふ 補ふ 飼ふ 買ふ 叶ふ 通ふ 競ふ 嫌ふ 食ふ 狂ふ 請ふ 慕ふ 從ふ 吸ふ 救ふ 添ふ 揃ふ 使ふ 問ふ 整ふ 伴なふ 習ふ 匂ふ 縫ふ 願ふ 拭ふ 這ふ 計らふ 拂ふ 拾ふ 舞ふ 惑ふ 迷ふ 向かふ 貰ふ 養ふ 屋ふ 結ふ（ゆ） 醉ふ 煩ふ 笑ふ 等

種類	正シイ假名	誤リ易イ假名
マ四行段	進んで。進んだ。	む。

（類語）編む 歩む 勇む 痛む 營む 產む 羨む 嚙む 屈む 悲しむ 刻む 組む 汲む 苦しむ 込む 沈む 進む 深む 賴む 樂しむ 縮む 摘む 謹む 富む 惱む 盜む 飲む 望む 勵む 踏む 病む 休む 讀む 拜む 惜しむ 等

種類	正シイ假名	誤リ易イ假名、二、類語
ハ行上一段	強ひない。強ひよう。 強ひて。強ひた。強ひたい。強ひます。 強ひながら。 強ひる。強ひる時。 強ひれば。強ひよ。強ひろ。	一、い、ゐ。 二、生（お）ひる。戀ひる。用ひる。
ヤ行上一段	報いない。報いよう。 報いて。報いた。報いたい。報います。 報いる。報いる時。 報いれば。報いよ。報いろ。	一、ひ、ゐ。 二、悔いる。老いる。 い（射）る、い（鑄）る。
ワ	率ゐ（居）ない。率ゐよう。	一、ひ、い。

種類	正シイ假名	一、誤リ易イ假名　二、類語
ア行下一段	え(得)ない。えよう。 えて。えた。えたい。えます。 える。える人。 えれば。えよ。	一、ゑ。 二、心得る。
ワ行下一段	植ゑない。植ゑよう。 植ゑて。植ゑた。植ゑたい。植ゑます。 植ゑる。植ゑる時。 植ゑれば。植ゑよ。植ゑろ。	一、え、へ。 二、飢ゑる、飢ゑる、据ゑる。
ヤ行上一段	率ゐて。率ゐた。率ゐたい。率ゐます。 率ゐながら…。 率ゐる。率ゐる人。 率ゐれば。率ゐよ。率ゐろ。	二、ゐ(居)る　用ゐる。 ○「用」は「ハ上一」にも。

誤り易い口語形容詞・形容動詞の語尾

ヤ行下一段	絶えない。絶えよう。 絶えて。絶えた。絶えます。絶えながら… 絶える。絶える時。 絶えれば、絶えよ。絶えろ。	一、へ、ゑ。 二、徳える。覺える。消える。聞える。越える。肥える。榮える。聳える。生(は)える。冷える。殖える。吠える。見える。燃える。
ハ行下一段	考へない。考へよう。 考へて。考へた。考へたい。考へます。 考へる。考へる人。 考へれば。考へよ。考へろ。	一、え、ゑ。 二、與へる。誂へる。訴へる。押へる。衰へる。換へる。數へる。構へる。加へる。拵へる。答へる。支へる。從へる。添へる。揃へる。堪(た)へる。貯へる。湛(た)へる。携へる。讐へる。仕へる。傳へる。調へる。唱へる。控へる。迎へる。辨へる。総へる。

種類	正シイ假名	一、誤リ易イ假名　二、類語
ク活	たか(高)うございます。 あさ(淺)うございます。 かた(堅)うございます。 あぶな(危)うございます。 こは(剛)うございます。 うま(甘)うございます。 はや(早)うございます。 から(辛)うございます。 よわ(弱)うございます。	一、こ。　二、赤い。暖い。近い。深い。短い。若い。長い。苦い。 一、そ。　二、煩い。臭い。 一、と。　二、冷い。めでたい。 一、の。　二、黍い。穢い。少い。無い。 一、お　を。　二、淡い。 一、も。　二、狹い。 一、よ。 一、ろ。　二、荒い。暗い。 一、お、を。
シク活	新しうございます。	一、しゆ。 二、怪しい。勇ましい。嬉しい。欲しい　等
形動第一種	廣からう。	一、かろ 二、高からう。堅からう。重からう　等。

誤り易い口語助動詞

種類	正シイ假名	紛レ易イ假名
形動第二種	靜かだらう。 丁寧だらう。 靜かでせう。 丁寧でせう。	一、だろ。 二、明かだ。穩かだ。朗かだ。柔かだ。はでだ。ぢみだ。丈夫だ。立派だ。結構だ。急だ。變だ　妙だ　等。 一、でしや。でしよ。 二、明かです。丈夫です　等。
及び「う」「よう」	雨が降らう。早く行かう。 誰か居よう。誰か來よう。 どうしようか。勉强しよう。	ふ。 やう。よふ。 しやう。しよふ。せう。 ○「ませう」と言ひかへ得る。 「ヨー」は「よう」。

そ	あれは學校だらう。 あれは學校でせう。 學校へ參りませう。	だろう。だろふ。だらふ。 でしやう。でせふ。 ましやう。ませふ。
の	足りなからう。 讀みたからう。	なかろう。なかろふ。 たかろう。たかろふ。
連語	昨日は君も行つたらう。 掃除は濟んだらう。	たろう。たろふ。たらふ。 だろう。だろふ。だらふ。
「せる」「させる」の活用	言はせない。言はせよう。 言はせて。言はせた。言はせたい。 十分言はせる。言はせる時。	さない。さう。 し。 す。
	受けさせて。受けさせた。受けさせたい。 試驗を受けさせる。受けさせる時。	さし。 さす。
接續	來られる。	きられる。
	來させる。	きさせる。
	運動しない。 運動せぬ。	運動せない。
	正直でなければならない。 正直でなければならぬ。	正直であらねばならぬ。
	誰もこ(來)まい。 散歩しまい。	きまい。 すまい。せまい。

通用字及び正字對照表

（茲には其の主なるもののみを擧げた）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
両	兩	効	效	冠	寇	挿	插	潤	閏
仮	仞	即	卽	寶	寶	擴	擴	潛	潛
侯	侯	郷	鄉	剋	剋	攢	攢	陰	陰
免	免	郷	鄉	帽	帽	攜	攜	熔	鎔
兎	兔	厨	廚	并	幷	整	整	猿	猿
冒	冒	廐	廐	屏	屏	既	既	猪	豬
冗	冗	廐	廐	棄	棄	昂	昂	猫	貓
決	決	収	收	稟	稟	節	節	笄	笄
況	況	叙	敘	往	往	晋	晉	玄	玄
准	準	唇	脣	恒	恆	桿	杆	瑣	瑣
凉	涼	器	器	慨	慨	概	概	畫	畫
減	減	噴	噴	憩	憩	欵	款	留	留
函	函	場	場	懺	懺	殲	殲	畧	略
刄	刃	塚	冢	戲	戲	氷	冰	痴	癡
剪	翦	墻	牆	拿	拏	温	溫	皷	鼓
劔	劍	寃	冤	抜	拔	濵	濱	盃	杯
纖	纖	繊	纖	續	續	續	續	紀	紀
脈	脈	群	羣	皐	皐	衛	衞	象	象
罰	罰	致	致	蔭	蔭	鍵	鑕	隣	鄰
纏	纏	腸	腸	萠	萌	識	識	輙	輒
蹟	蹟	蹴	蹴	鉾	矛	雜	雞	驅	驅
羅	羅	花	華	衽	袵	谿	溪	遁	遯
船	船	荒	荒	訛	譌	踪	蹤	錆	銹
虱	虱	謹	謹	嘩	嘩	躊	躇	鑪	鑪
櫓	櫓	鱸	鱸	瓦	瓦	体	體	但	但
借	借	胄	冑	冑	胄				

同字表（どちらを用ひてもよい）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
万	萬	並	並	亡	亾	嚊	齧	峯	峰
廝	廝	叶	協	襄	峨	村	邨	毘	毗
岳	嶽	普	普	朴	樸	稿	藁	競	競
俟	埃	野	埜	庵	菴	棊	碁	無	无
京	亰	坂	阪	嶋	島	案	按	烟	煙
粘	黏	穀	穀	留	畱	款	欵	憩	憩
紀	紀	略	畧	癡	痴	擬	擬	續	續
沖	冲	妍	妍	冨	富	楫	楫	狸	貍
姉	姊	妊	姙	忘	忘	棕	椶	絡	絡
坂	阪	埜	野	庵	菴	棊	碁	無	无
嶋	島	案	按	烟	煙	粽	糉	紅	紅
京	亰	坂	阪	嶋	島	案	按	烟	煙
粘	黏	穀	穀	留	畱	款	欵	憩	憩
紀	紀	略	畧	癡	痴	擬	擬	續	續
沖	冲	妍	妍	冨	富	楫	楫	狸	貍
姉	姊	妊	姙	忘	忘	棕	椶	絡	絡
考	攷	慙	慚	稿	藁	棊	碁	無	无
概	槩	碕	碁	裸	裸				

本來ハ異字デアルガ同字若シクハ略字トシテ往々混用サレルモノ。其ノウチ*標ヲ附シタ文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バナイ

瓦（ワタル）。「連瓦」

亘　桓ニ同ジ。

体　笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。

體　カラダ。

但　タヾシ、タヾ。「但馬」

伽　ツタナシ、拙劣。

僭　ミダリガハシ、猥。

僭　自分ヲ越エテオゴル。「僭越」

胄　カブト、兜。「甲胄」

冑　ヨツギ、嫡子。又子孫。「胄裔」

協　カナフ、叶。

協　オビヤカス。脅。

刺　サス。「刺殺。刺客。名刺」

刺　モトル、ソムク、垂戾。「亞刺比亞」

台　星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」

臺　ウテナ、ダイ

後　ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。

后　キミ。「皇后」

商　アキナヒ。

商　モト、本。

壺　ツボ。

壺　ミチ、宮中ノミチ。

姫　ツヽシム。

姫　ヒメ。

*托（タク）　拓ニ同ジ。オス、ヒラク。

*託（タク）　ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

*担（タン、ゲツ）　ハラフ。又アグ。

*擔（タン）　ニナフ、カツグ。

*改（カイ）　鬼ヲ追フトイフ星ノ神。アラタム。

*槍（サウ）　ヤリ。

*鎗（サウ）　鏘ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。

欠（ケン）　アクビ。「欠伸」

缺（ケツ）　カク。「缺席」

*糸（ベキ）　ホソイト、細絲。

*絲（ケツ）　イト。

*羨（イ）　支那ノ地名。

*羨（セン）　ウラヤム。

*虫（キ）　魚介類ノ總稱。又マムシ。

*蟲（チユウ）　ムシ。

*詫（タ）　ワビ、ワブ。「詫狀」

*詫（タイ）　詑ニ同ジ。アザムク。

*諂（ナン）　ヘツラフ。

*諂（タウ）　ウタガフ、疑。

*證（シヨウ）　アカシ、シルシ。「證明」

*証（セイ）　イサム、諫。

豊（レイ）　禮ノ古字。

豐（ホウ）　ユタカ。

*迄（キツ）　マデ。

*迠（セフ）　ユク、行。

*選（セン）　エラブ。（ヨリトル）

*撰（セン）　エラブ。（書物ヲ編纂ス）

*郤（ゲキ）　ヒマ、隙。

*卻（キヤク）　シリゾク。「退卻」

*鍛（タン）　キタフ。「鍛錬」

鍛（カ）　シコロ、「鍛」

宛字（左のやうな字は假名を使用するがよい）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、遉
しまふ　仕舞ふ
せつかく　折角
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄終

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十二月三日發行
昭和八年七月二十日訂正再版發行
昭和十二年九月十五日訂正三版印刷
昭和十二年九月十五日訂正三版發行
昭和十二年十二月十八日訂正六版印刷
昭和十二年十二月二十一日訂正六版發行
昭和十二年三月二十日訂正四版印刷
昭和十二年三月廿三日訂正四版發行
昭和十二年七月十日訂正五版印刷
昭和十二年七月十三日訂正五版發行

帝國實業讀本　改制新版

編者　芳賀矢一
訂補者　上田萬年
同　長谷川福平

發行者　合資會社　冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地

代表者　坂本守正

印刷所　精版印刷株式會社
大阪市西淀川區海老江上四丁目二十三番地

發行所　合資會社　冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田二一七一—二一七八番振替口座東京五〇一番

定價
卷一—卷六　金六拾錢
卷七・卷八　金五拾四錢
卷九・卷十　金五拾壹錢

HAGA 芳賀

千早ぶる
神の時代より
日の本の
國のいとめと
成りにしこの山

Hiroshima Kogo School
Kantikuka II nen
K. Nagao

建築二年
長尾清